

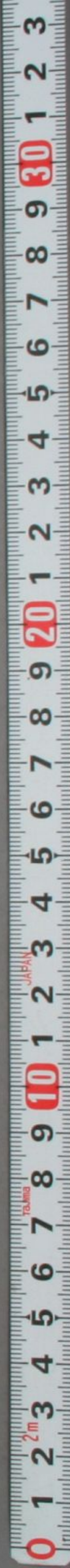
雙魚堂日記

卷十四

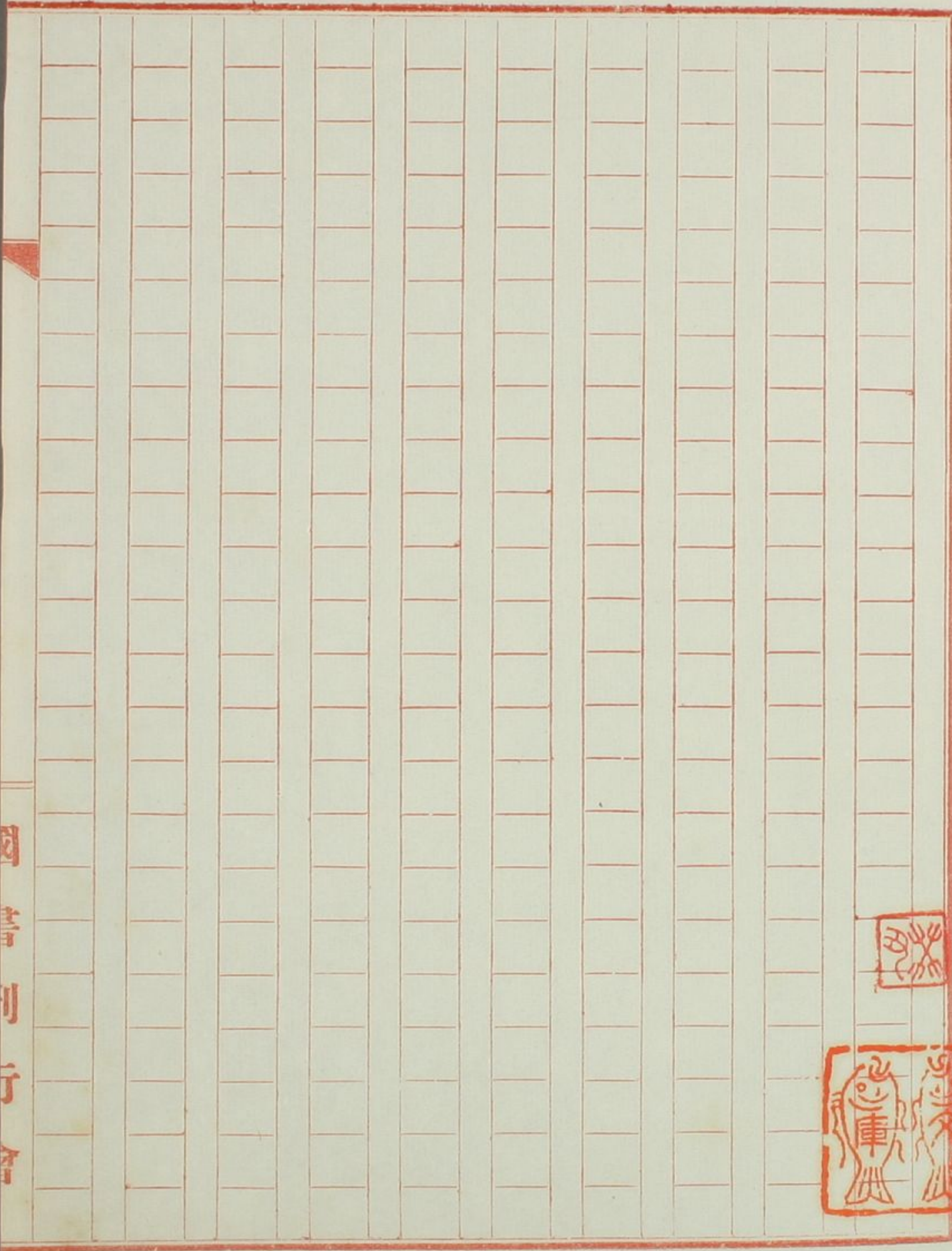
大正元年一月三號起筆



特別
イ4
1919
263



176538



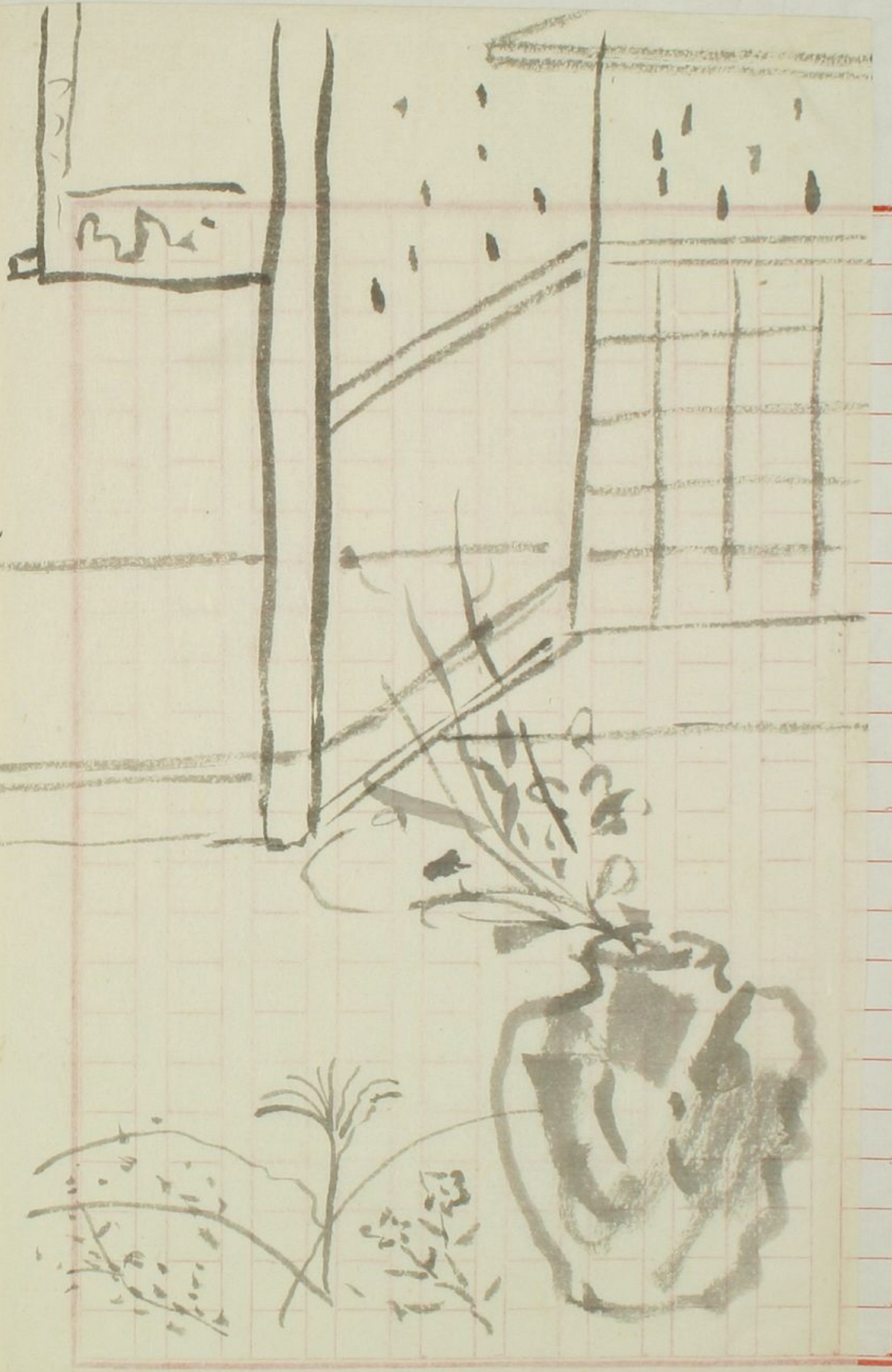
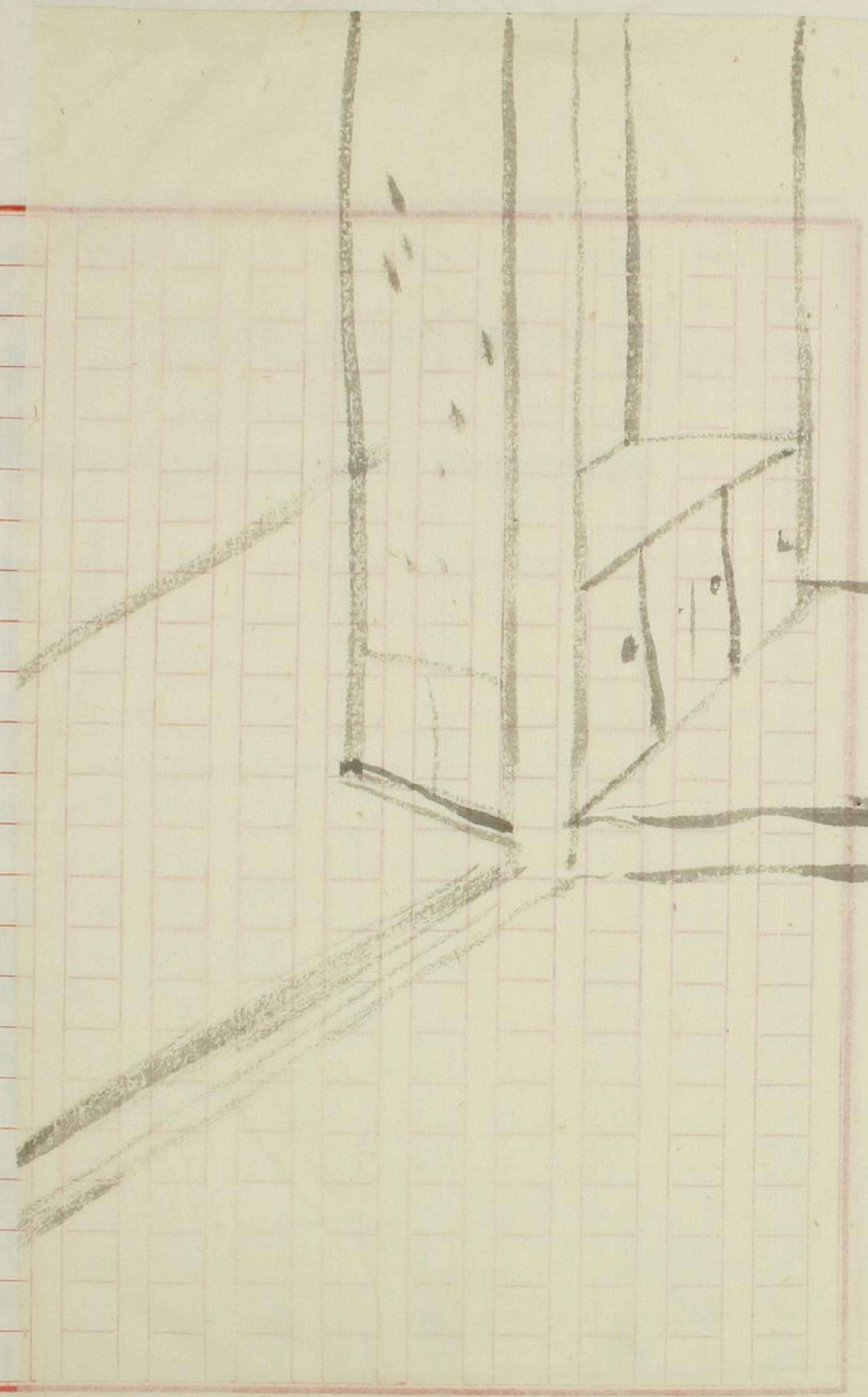
38- 9049

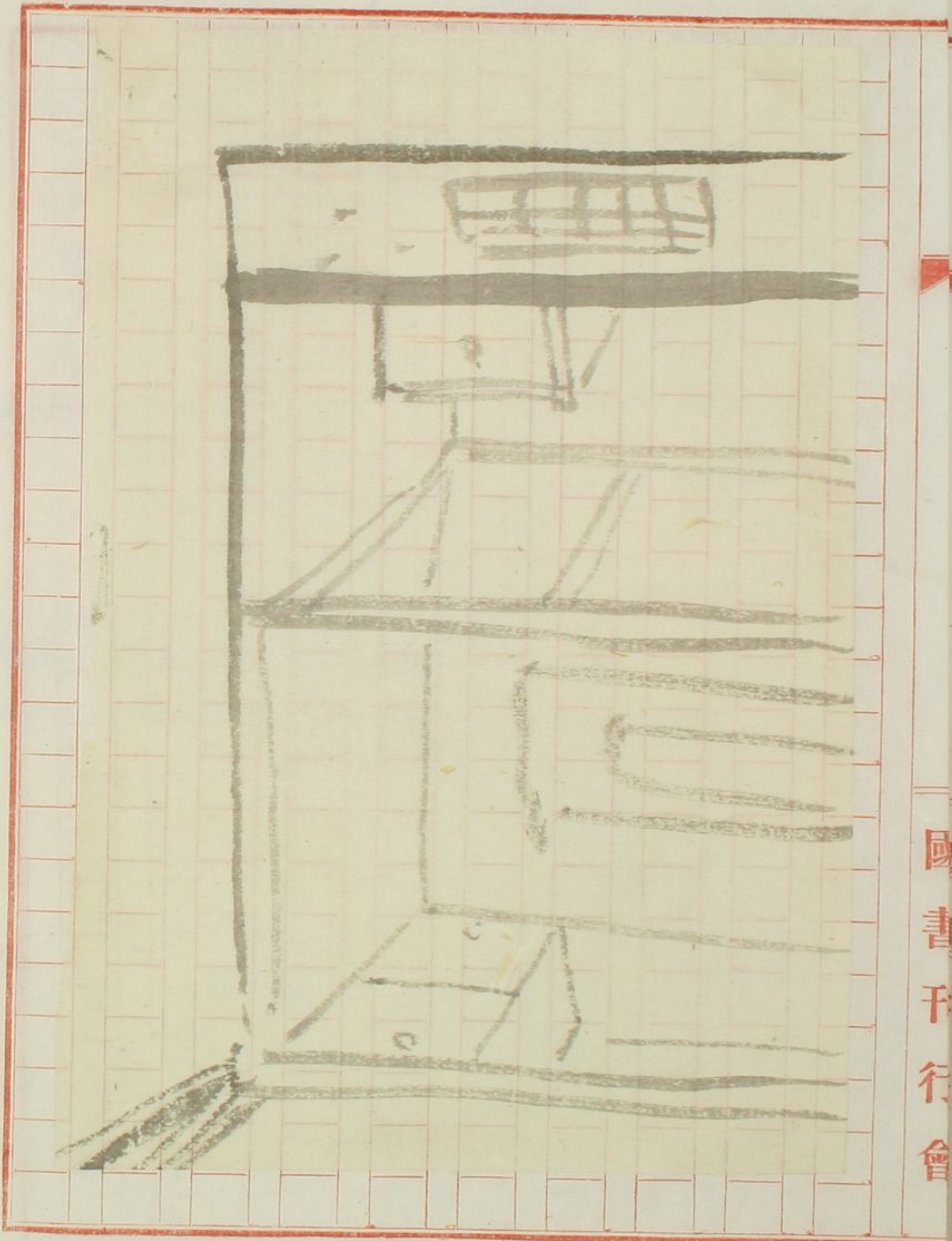
佛影抄

上：揚々々々々西花紙の一片也此紙物
 大十枚と書て黄毫の製を以つて包
 み絹紙を以つて外部を密々こころけ
 たりと恐々々佛の胎内を以つて入るあり
 たりん余は此紙の紙二十四五個を
 得々々々々 ちりて入るるものも細紙
 のる葉紙も今んちりて同じ体の紙也
 入るも柄を紙に傳へて又高々二
 二印創しちりたりと印創のももこ
 と同じ

○魚譜二冊と云ふしあるものあり各冊魚
 の名物を括しての楊本を以て各冊魚
 也、楊本より多くあるものも魚の根を括し
 此也ぬりて括してのものを魚の根を括し
 るもの括してのものを魚の根を括し
 を用ひて括してのものを魚の根を括し
 括すべし 魚譜を楊本と云ふ

此譜を以て今も魚の根を括してのものを
 と是しく古例の例を以て嘉礼を以て括して
 長節表紙括してのものを括して





○此以築地の特産品として生皮と紙を以て床
 の形を以て造る英中各款味ありて又其
 間一と云う所別ありてし床側の意匠お
 七しうく見えぬ

○此以昔傳の香枕を藉て坐せしむる内圓
 あり又神香爐一を得てて茶人呼吸の心
 の所と云ふも手紙形 桐葉の外部深成香
 葉を以て二ヶ所に刻し透し紙を中央を
 割れ中々金鳥の香物装束を以てし何れ
 七地も海に直にす。故出来たり。むかひ

カオウの意匠と内部より入りたる外部と
飾りもその意匠より糊粉方盛の菊花を
描きあはれ球をひらきひらきと合しあはく
廻はせば内部の金箔の結核あるもあは
れらるる也此の山体の相をみれば心
もと装束飾を極む采も心遣と見ゆると
上部香の出来遣しおりのあはくも金箔
をいかにいともゆりも金箔をいとも
の花押あるも、采人の意匠とある成服す
よふえも其の一例也

○金石搦本二幅を著述とて此は日蓮代のもの
ありて所りありて文の一事文祿の後
かあはく朝鮮の二王子を搦りて後教を
いとも朝鮮四王を徳と謝恩を志しと
る文書の刻本也搦物札の事也原本との
るる事ありてありて年入るるも搦本也
他の一事崇祿の年飾あり鏡鏡と鏡
刻しありて遠近と藝伎を搦しありて
朝鮮四王の日光廟と七曲しあり鏡の搦本
也徳川氏の氏北鏡を搦るるを許されぬ

此の稿本と稀也年代表しと云ふ又日
 本皇紀文の中一編とす可うする高敷
 ○此の稿本の稀也と人と考へて此の稿本の
 目を語んとすその語又身し今も四十年前此の
 物の語とすく洋字を考へていぬとす。履歴
 ありしと及んで其の語を正徳とす。其
 味ありともゆゆの語のすいとす。其
 却しとす。ゆゆとす。其の語を正徳とす。其
 の語を知りてす。其の語を正徳とす。其
 と考へて其の語を正徳とす。其の語を正徳とす。

此の稿本と稀也年代表しと云ふ又日
 本皇紀文の中一編とす可うする高敷
 ○此の稿本の稀也と人と考へて此の稿本の
 目を語んとすその語又身し今も四十年前此の
 物の語とすく洋字を考へていぬとす。履歴
 ありしと及んで其の語を正徳とす。其
 味ありともゆゆの語のすいとす。其
 却しとす。ゆゆとす。其の語を正徳とす。其
 の語を知りてす。其の語を正徳とす。其
 と考へて其の語を正徳とす。其の語を正徳とす。

とらうをり、新の、不氣の、はるからあ、切り
板紙：板紙の、荒らん、は、こ、と、唯、之、ん
を、思、い、ま、ら、う、。、信、末、を、叙、す、入、止、ま、と、云
ふ

〇七四の政局：此、昆、文、系、敵、の、く、あ、し、う、
り、ま、し、と、ま、接、不、ま、き、う、と、を、語、す、如、の、西、を、
寺、内、滋、の、増、師、洲、越、に、恨、あ、ら、あ、し、う、と、山、谷
と、文、海、子、う、あ、と、山、谷、其、海、の、説、し、う、と、増、師、と
延、叙、こ、ち、を、は、さ、う、う、ん、唯、の、最、近、
之、の、を、軍、機、に、行、う、つ、の、か、め、あ、と、こ、ん、を、侍、ひ

と、ん、軍、術、出、く、地、四、後、ん、こ、ん、は、
元、朝、の、う、う、あ、う、し、ん、し、西、内、答、と、こ、ん、を、ま、き
ま、ん、あ、の、事、と、ん、か、と、男、を、く、い、て、宋、説、せ、し
又、其、故、山、公、説、と、し、あ、と、ま、い、こ、ん、し、尚、説、を、翻
し、説、く、と、増、師、説、を、因、り、七、節、う、う、西、内、に
ひ、さ、く、柱、と、謀、う、と、ま、柱、と、ま、よ、吹、く、今、
き、説、し、如、く、冷、法、と、ま、あ、う、し、ふ、あ、ふ、
と、説、お、こ、説、し、聖、説、を、御、き、其、の、説、と、こ、解
う、ん、下、心、こ、う、し、西、内、七、大、は、柱、う、と、説、
説、こ、る、と、ま、聖、説、を、御、き、ま、ま、こ、ん、も、叶、う、

と茲に総辭職をみづうのじちをゆさるるもん
 うととるを左にけりて又元元令殿に就
 て原の語を言ひ伝へた地合識を於て函館に
 識論をくししとる言ふ也大山の如きて河
 口等の然るに似たり起りし言を指す口角
 泡を元のしとると云ふ又井上のこととて初
 めも西洲の物續流をくしし一紙柱の如
 ね心移方を推し、お方に勤しとて後流し
 して流すしとる結果お方も勤しとるん
 が周囲のる所にて是に感得を起し以念

しとるうとて少おのき構と語しとて然る
 こを元元せもあきえくとて見くたう
 ○はも田わたりたも御しとて今も流流と
 載とてしとを例のしとて人を以るも流流し
 する、紋切り形の祝詞をいとも其の御免と
 断り、先流年力を入つてある言家の継
 志園の建碑の事より其の北條原内の故
 味あることとあつし固るる自らも七印内の名
 流とあつた是とてそのまゝの心つき流流子
 の流流とて流しとるを其の御しとて

曰はるの書不意しん
 の身も難の言ふ事あり申可はるし探る余
 に聞て、是も事と載す、余も海瑞の改味
 ちうも、大かゝる事と、噴飯りてくさ
 ば、彼の曲の體を、さうりとも、身は、此の
 女を拜す、いふを、連を、喝破し、その日、流
 ら、事、言、也
 ○市島、杉節、と、井と、橋、ふる、お、印、お、く、梅、え
 し、身、の、杉、節、と、井、と、橋、ふる、お、印、お、く、梅、え
 と、し、め、お、の、改、味、と、此、橋、る、え、の、橋、付、也

一口ばなし

嬉 生

◎近來如何なる風の吹き廻しか、義太夫熱が東京の上流社會の間に物興して、日本俱樂部の會員中には大分感染して居る連中が少なくないさうな。
 ◎右の會員中にも帝大教授法學博士加藤正治、辯護士法學博士高根義人など云ふ學者連迄が親不孝な聲を張り上げて、妙な身振りをやるので、一寸問題になつて居るさうな。
 ◎前大藏大臣山本達雄も大の熱心家だが殊に女義太夫が好きで呂昇を最負にし、東海道旅行中態々下車して呂昇の義太夫を聞いた位で、大藏省へ通ふ馬車の中にも、呂昇の假聲を唸つたと云ふ評判が高いさうな。
 ◎實業家中では大阪の土居通夫を始めとして、田中平八、尾高次郎、正木照藏などとは巧いもので、中村清藏、山科禮藏、吉村鐵之助之れに次ぎ、添田壽一、安田善三郎、川崎芳太郎、小野友次郎、高田友吉、諸井恒平なども、御多分に漏れぬさうな。
 ◎右の内て自稱天狗連が杉風會と云ふを

設けて、毎月一回宛唸つて居る、天狗が杉林に棲んで居ると云ふ所から命名したのぢやさうな。
 ◎諸井は若い時に義太夫に惚つた爲めに母親に叱られ、そんなに好きなら勘當するから義太夫語りになれと言はれた程の曰く附きださうな。
 ◎親子で唸るのは濫澤榮一、同篤二、柳谷謙太郎、同卯三郎だが、濫澤篤二と來ては聲もよく節廻しも實に上手なもので本職も跳足ださうな。
 ◎早稻田大學理事市島謙吉は淨瑠璃に就て多大の趣味を有し、大の近松宗ださうぢや、それとも知らずに學生數名が市島の門を叩いて、義太夫の講釋を始め、果ては娘義太夫の批評に迄及んださうな。
 ◎市島は片腹痛しと默聴して居たが、學生の氣煽少しく収まつた頃を見計らい、突然諸君！諸君は高座の娘義太夫を見てあらうが、未だ裸體の娘義太夫を見たとはあるまいと言つたさうな。
 ◎學生等は意外の此一言に眼を圓くして驚き、一體それは如何したのですかと、異口同音に問ふたさうな。
 ◎すると市島は得意になつて、然らば諸

君に娘義太夫裸體實見の顛末を説明せんとて、咳一咳したさうな。
 ◎事は市島が親友文學博士坪内逍遙と相携へて、熱海に遊び露木と云ふ温泉宿に投宿した時の出来事ださうな。
 ◎坪内と市島の兩人が一所に、浴室へ出掛けて着物を脱ぎ、ザンブとばかりに飛び込み、愉快くと大恐悦であつた、所へ間もなく戸を開けて入つて來た者があゝ、一人は老婆て一人は艶めかしき年増の婦人であつたさうな。
 ◎聽て其艶麗なる年増の婦人は、着物を脱ぎ耻かしさうに、坪内市島の入つて居る同じ湯槽の内へ入つて來たさうな。
 ◎兩人が湯から上つて、自分の室へ戻ると、女中は御一所にお湯を召した別嬪さんを御承知してしやうと言つたさうな。
 ◎兩人はイヤ少しも知らぬが、一體彼れは何者かと尋ねた、すると女中は笑ひながら、彼の方は有名な女義太夫の綾之助さんですと答へたさうな。
 ◎娘義太夫裸體實見の顛末依て如件と市島は面白可笑しく説明したので、學生等は手を拍てヤンヤと唾したさうな。

あゆまの印具と事とあるるを七國に預るべき
のあさまきと文飛ぶ舟中の念也といふこと
さうして回程のこの也

○あす城をのまむは狩命家の書とありし
此の作名一を獲るを思ひ高徳の像を畫す
き上又二二万字と像貨と楷者と漢記し
あす真金と書す像と字を傳つるを
の木像を写しけるは神來生けること
真金高徳の土地像を心富す所あり
あすは家花と城名後缺の山か物一二あ

り未と此程のこのありし徳い入るて家珠と

此の真金の楷者と見るにこれ楷を其文章
と見るにこれ楷を其勅王恩志と見るに

楷をゆた高徳の真実を表はすこと

これ楷を臨して高徳の存在を

と見るにこれ高徳の

○余り架中未と城名世にのち高徳と

これ高徳の楷と高徳の真実を

幸ひしこと楷と高徳の楷と

は如く楷と高徳の楷と

香山を仰ぐ人も也。星野の海に舟を
度る。三年先生が病者前への書あり。徳
孝と云ふ。先生又らきとの事あり。中三
十の程し。書をとり。うけ。て。す。也。日附八月
十六日。陸奥甲府と署名あり。

〇此年書。書。骨。並。の。関。係。は。四。六。の。所。
を。こ。も。よ。の。こ。と。の。程。の。あ。る。所。に。親。の。時。
に。此。傍。の。三。河。を。こ。も。よ。の。こ。と。も。又。あ。げ。し。
く。ま。り。れ。ど。も。と。後。も。は。な。り。し。う。の。や。る。の。む。三
河。の。之。の。自。後。は。あ。り。し。と。ま。げ。は。本。來。の

お國志の事も古といふ。此家があるといふ
は。海。の。前。に。親。の。而。を。し。も。是。る。と。の。こ。と。
を。行。て。一。般。に。あ。つ。た。こ。の。所。を。ま。は。る。は。出
入。を。し。た。つ。た。親。の。ま。ち。の。も。あ。つ。た。の
御。手。に。あ。つ。た。外。國。人。の。ま。ち。に。住。ま。す。ま
の。高。校。を。元。始。の。こ。と。を。行。て。え。其。の。ま。ち
の。内。と。自。分。の。名。を。取。り。し。以。て。其。の。内。
心。の。相。也。を。も。と。出。る。此。家。に。ま。ち。は。錫。の
相。也。に。ま。ち。あ。る。と。ま。ち。

繼志園に就て

早稲田 市島謙吉氏談話

あるから御免を蒙りたす、されば、毎年の事であるから、新年慶に就て、

つて、窮民の惨状は前同よりも甚しいものがあった、是に於て再び土工を起し、

元より世の所謂別荘の如く、泉石花木の美を盡して居る譯ではない、



繼志園

紙であるから、其土地に就ての簡單なる御話の一つある、何うか難談として聞いて下さい、其は外では無いが繼志園の事である

内藤鍾山といふ儒者が、まごの事蹟を今石に刻さんとする處のもの、

其豈非積善之除孽耶、樂善祖宗之志也、繼志子孫之責也、嗚呼是此園之所以不可無記也歟

○毎朝枕をて行く氣に起るぬるんが其の處
 のあざ在に行く氣に起るぬるん三日のあざ在に
 家を出た、急行でも汽車や四のり以上でもこの
 所を越えて多岐な定を箱義のそぎし世
 車海を三崎まで行く目で伊豆域をこ乗り
 うへ南條と平あううて車に二十すび
 に行くと長と三ふ所うある、高白のあそ
 ちこ、あそひた、地を四十一年初めは
 を見るとは、あ人の久後枝葉のさび
 びをを心とあゆこ、初めに別在を心と

とあ三年前のことある、久後をうう
 多岐味の思ひ違、葉と既も味とみう
 する所う高田のあそも久後う及針をし
 みつてう大工を替へてをきうこのあふ、あ
 る、家の構造と流石に保離んをしてあ
 第草のむねのれや、庭の切り向合棚のつ
 け方陽殿の心り方、あ高白月海と拂つ
 ここのあむけ、あ工凡の一寸出来、うぬる、意
 花枝や木枝の産き、所を浴衣をむと、梅枝
 をきれ浴湯の令印、あて出来て、あうも、あ

心を養ひ、種々其のゆゆの身を流し合ひては
 びつらくの事一う分つて其比、きりあしといこ
 とを山の紅石はのよの連載する積りむある
 ころ交くは略するなり、立友様をゆりて竹細く
 へき遠くすゝむ、技ある、細かくとも東をく屋
 つて修し様をさと技あるを流する、用味を扱く
 奇有しと略今日、暇ある久保を、行くのふり候と
 するに日長らば志ある、三内を、あむり行く、あひ
 こところあつたひのひ久保を、不審な思ひ持たね
 へて何れも、山は事ある、法を、口ごせりし

つつともおぼし、つおひのひ、細く、なすけりては
 とろり、おぼし、とろりと久保の下、輝く、色、惠、え
 るん、ま、日、隔、後、よ、是、嘉、ふ、あ、つ、れ、と、い、ん、し
 久保と有る、下、輝、を、致、互、し、れ、と、ろ、り、の、様、を
 の、體、を、よ、ろ、と、い、ん、聞、く、傳、の、お、き、き、は、い、流、り、あ
 又、甲、し、様、を、い、つ、久保の事、ある、と、言、お、り、れ、て
 へ、流、く、久保の事、ある、意、の、は、い、け、り、時、米、禮、り、を
 く、室、を、屋、を、指、し、米、屋、を、之、現、を、い、ふ、け、り、は
 米、を、海、へ、ぬ、久保も、山、七、を、形、し、何、の、日、の、あ、き
 是、或、人、と、言、は、る、つ、つ、こ、こ、と、出、來、ぬ、其、以、の、字、

を御座る。この大坂のひまわりをあるは
 子大坂の一面を禁過的な税を課するを
 つにんふと大分洲の間に中一もあつて久保
 の也迄の氣を志をせしむるのまゝ先を久保
 るに托して課税を免えんと欲せし久保より
 よくと具してまきいざ鐵國方の地を
 持ちてんふ心のしこんふ防えぬ佃の食料
 と此免うと他人垂賣のしるを免給ふ事
 有り給ふと鐵を渡りたこととあるとそのを免
 一に

久保の三普會此へ入つたを自分も七段宛前
 のふと世にの西南段の段一二年の流し
 三のふと分十二年頃とくる、その時の月
 一四十四日とあつたとき、自分の入社した
 つたに、十四年とあつたとき、記憶する自分の
 月給も又四十四日とあつたとき、氣もした
 が久保と種々の經歷をわしし、四十四日とあつ
 たことをあへて、自らを傳へるをみるは
 と流しあつたこと、知れぬものを流すのて一美
 一に

久保自身曾躰致味をまする事由を述りて云
あつと●新編の合校(はばる城の)と致此と
りしに濟七家やふゆ家名を掲りてこの白紙の成
過の家出入すことゝ好むあひあつた間傳す
歩ぬや骨董を多くえをせん或は桂茶の茗
と神やせんいりしとに生けりる古画致味●骨
董致味を覚く初めとことゝる長
久保の致味もさうしくゆ方面がある、あつとどこ
うも脱法の高のあつて而さうい、栗生の衣服や
十徳まことと茶入の御徳向とひもまの金さへ

あつと、此後もあつと一入の骨董と何とゆつと
とえとらば能装束の製んじとすのて長つた、
あつと入信もいりく突えをみんまもてま
あつと噴飯のまのあつ、旅行とすことと靴
ひらけぬ、まぬとまぬとまぬとまぬと大
るまを何んうら掘出しまうまぬと時代
と此の調ねする紐をりけするまぬと茶客をい入
久保あつとと路りまぬと人字を焼かさ
才自のう背が捨ついと出つる、何れのあつ
日無く何れくと旅りまぬと人字をうけとを

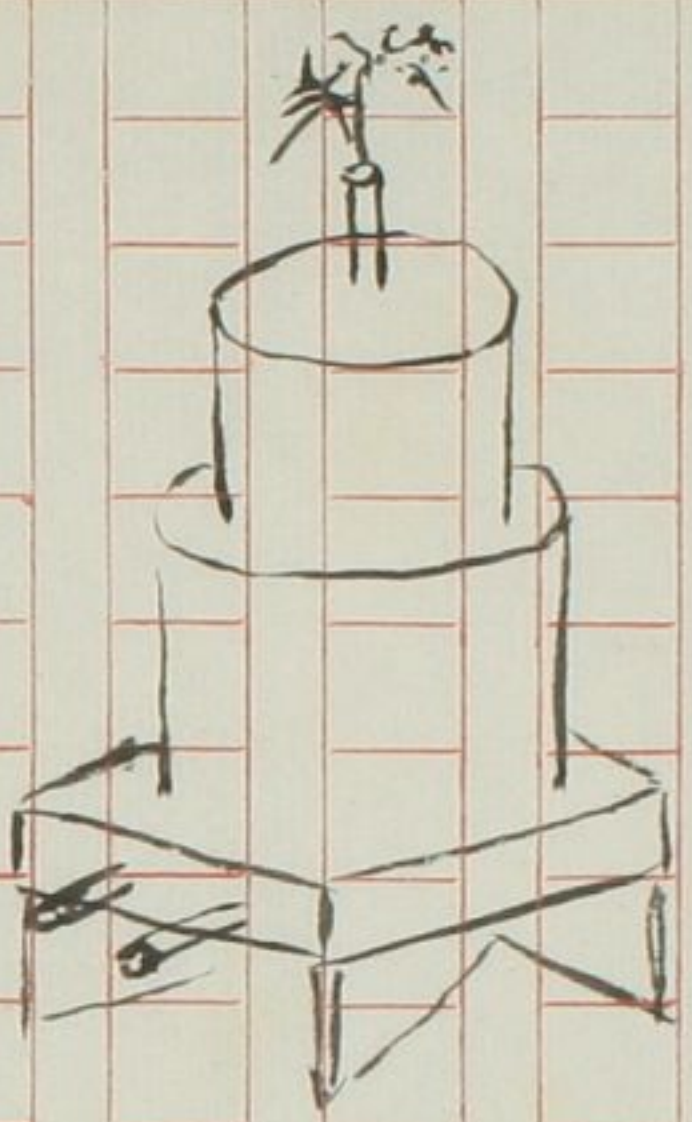
するのよゆへうとる供とあらせ自分らゆのこ
 死を擡ぐて出るとゆくの事しつ来れを己に
 く車に乗つてゆりあ供と父と回乘を既する不
 くる花を賣ゆへの方しきをも公けうのえづみ
 死う車とさうさくうはちぢのむや入る居
 る最末の存候五突の内こ客を破壞したの
 び久保を焚くうつれと傍とんしして居る細
 久の物候る也
 久保し花輪をえんことを需あところちあると何
 七おろすありそふを傳へる二三幅出し共と

にお阿部のと中林の園に菓産の富士の石を
 遊しそ山物、石と画ときつぎるぎしなうよ
 ろうさぐる也萩のの形ある居るあに果を
 の二字と大書ししは幅端を合指動きとと
 久保を突茶家むし日本突茶家合ととら
 比とそゆとて誠ふく其のそゆをせやくて見れば
 大要を抹茶の合とありしといふいふいふと抹茶
 茶のそ物に言は居る候きをさうさうを筆
 らうくワッロ、大細着く酒を飲め物を飲らふ候
 っし比、備し不祝あるる候合の故果とて

るに板敷の塀を凡そ二七間もきりんうめりも
 居りて見えておきやうと敷壇の正面を若しを
 惣ふ江戸大印大車門扉を札を打ちたる鏝櫃
 や掛しゝのちをへてくるも掛敷をさるべし
 ちも在母の時○ソツくるとま飾りつけ、青蘭の
 ト鏡まじり、おてゐる家の女婿山田三良の胸
 へし来る片をよきまきえづ刺を山向くもしん
 るも前刻のいぬも出てあつたやとやまにじま
 く三人に刺をとりてさるま直るすまぬあま由こ
 のちもさる三人お風袴をて出て掛好する

三人年如年六才位英武とまふお眼乃父の
 似てゝお女も快活しとあひ多糸さるる不乃
 父の似てゝお女も快活しとあひ多糸さるる不乃
 めりさる人もあつたもかゝりてお女もさるる
 とあつたもかゝりてお女もさるる
 雲片押さるるの深き海流のるお女もさるる
 後の三條お女もさるるの深き海流のるお女も
 さるるの深き海流のるお女もさるる
 庭をさるるの深き海流のるお女もさるる
 ちと満ちてお女もさるるの深き海流のるお女も

二着の鐵を飾り、紅白の餅を且ぶ久保を余
との鐵をさへ入るべく先が此の餅と鐵を載
せしむ三寶也、三寶を木を以て心をもて懸心



鐵釘を打ちて板を合
いせしむるは其蓋也
用し板を中央に交
又しするはさう餘の形
と圓のこころ御也小桶の
こまきこころ餘を入りし
固すくは後外しする

くは上紅下白、上鉄の一端は細き井筒をさしこ
みまゝの板をさしこむは紅餅のまゝかこまこと
はあかしくてもさるは板あるはを何れをもをさ
つけしむるは、さるは板を懸く
際十五の汁を流し、のみをもつてさす也と
さき、初めし念にす、此の三寶も餘の式も皆
三天の風の風を流す也とこゝろもさる人の流す
也又保とせしこゝろを面あるは是は好む事
よりんくも御もさしと三寶の心を久
保に由る事

多入瓊、江のの祖と保元の後深為義の旗の士、
と崇徳院の如く、この保元の一敗祖と保元
の如く、如く、如く、如く、如く、如く、如く、
この保元と保元、この保元と保元、この保元と保元、
いさよ、いさよ、いさよ、いさよ、いさよ、いさよ、
世尾の早結や、其の如く、其の如く、其の如く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
徳徳の徳徳、其の如く、其の如く、其の如く、
る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、

けある字、其の如く、其の如く、其の如く、
人の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、盛、
を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

の憾也

奉
祭世直江川大の神

この頃、揚子江の甲州を流るる水は、人々のいそぐに人
の産立をたすむに、世直の徳を、敬し、
まのし、まのし、
世直、揚子江の甲州の書、
この頃、揚子江の甲州の書、
世直、揚子江の甲州の書、
世直、揚子江の甲州の書、
世直、揚子江の甲州の書、
世直、揚子江の甲州の書、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、

る弘孝の御七掬甲の在りたるを主人酒次作
り高野の御中を終る

大政維新の詔を自今十六才、江戸より見ん
る申渡り呼出さんて目上座より後人自
ら自今よりふりたる其方より異代徳川家の
代官であるふはる大政維新と云ふは付
ては恭順を志す御恩やと云ふ事ひあ
つれは自今と云ふを吾家と云ふ苦し勤
王の家柄であるは無論王政復古を花か
らみであることなきは、さうすると後人と云ふ

何んまきしと云ふ事志であると思はれる
は政より起る世を起るは自今の下に居し
ねて云ふ換は申す其を新義と云ふは
當つて御主人の基由と云ふは木架橋一印
で御座る恭順と御異議なきことと御家の
女系を御主人の御心こころ京都へ起る
べし京都より木架橋御座るは何れも杜
若湯者たるは御主人も御心こころ見ん
しと云ふ事ひは御心こころ御心こころ
此……自今より家より代々代官母恩ひあ

するのみならず、兵を養ひて農兵を訓
 練し、此のこともあつた。その時、新政府も何
 うか、か、備い、う、あつたと見ても、元印を飾り、
 ん、れ、か、あ、あ、う、れ、う、ま、を、そ、ん、う、う、
 一、ふ、の、ま、あ、一、と、無、つ、れ、の、む、す、う、
 う、批、評、の、あ、つ、れ、の、む、す、う、あ、つ、ま、り、
 名、は、漢、文、で、示、す、~~練~~練、坊、に、到、り、ま、す、ま、り、
 き、な、う、い、土、間、う、農、家、の、業、比、を、ま、り、
 場、不、ま、り、似、う、う、か、あ、つ、ま、り、の、石、滑、う、
 採、り、と、入、る、へ、ま、り、あ、う、地、の、あ、つ、ま、り、
 の、中、に、お、ま、り、


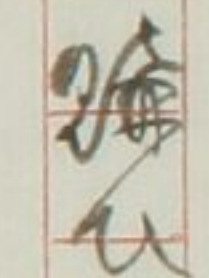

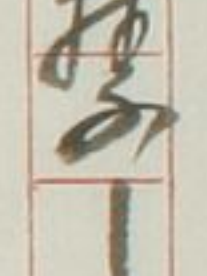
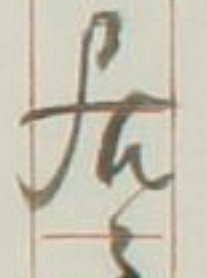


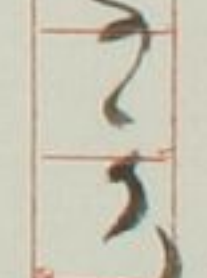

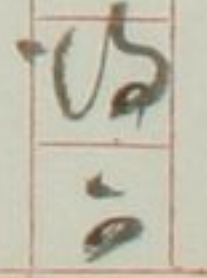
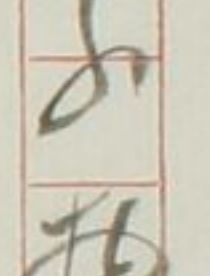
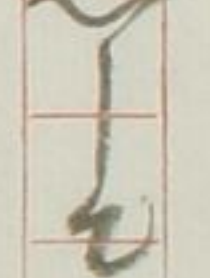

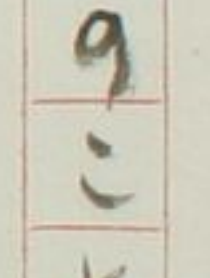

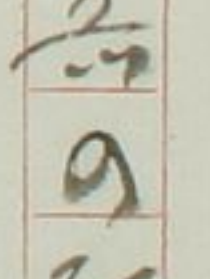




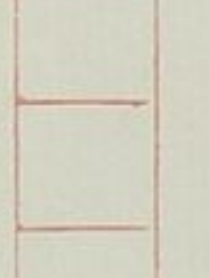



何れも、戦国時代のもの、
 柱と棟木と、
 こ、み、う、う、ま、り、古、能、
 く、か、い、も、寺、院、
 隣、道、の、寺、
 こ、い、ま、り、繩、を、
 り、こ、ん、ま、り、
 木、を、
 う、之、ん、を、
 床、と、し、ま、り、

の杖を空舟を意繩を以て上り吊りしるん外
 之れを結んで何れも古今の札を祭き神酒を
 さいけをあると神酒とよとある行状をある
 しあげるとと執りしる其の古風をある
 舞を有し行状を二おねる人びと神棚をお
 しと大小あぞ釣合はせるとの意繩もて
 神棚のくつりし上げんを其の一個の印
 の目土間を主とせんてあるとある此の印の
 て舞ししる其の意風をあるゆめがゆめあり
 する昔ののやまの思ひんと深く執味を

感ししる凡そ江戸の意風をゆめとのをぬき
 こゝにありぬ地々をえてゆつことら土間
 二一二の砲架あつた大砲を有し表壇の上
 二大なるお二三のあつたとあるとらん又ら
 一二の砲架を有し示す、皆そ易州の砲架を
 築きしるたの木造の模型也
 一砲架の終つて離しとらんとする時多敷の同社
 男せうする、こゝにその家を有し火ぶき
 の札を賞りん有り也、日蓮宗の同社也
 身延山を舞しするゆめを有し此の札

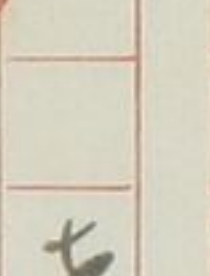


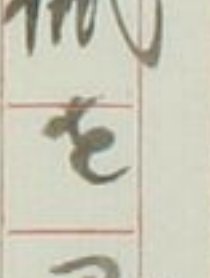



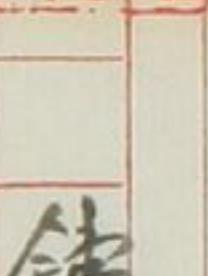
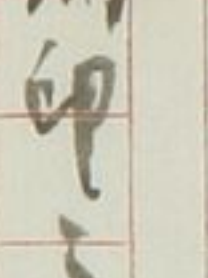
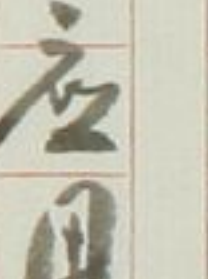
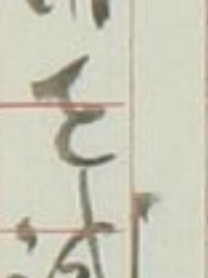
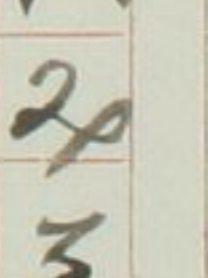
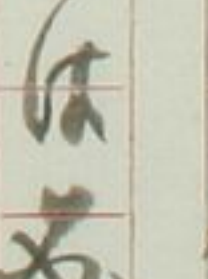
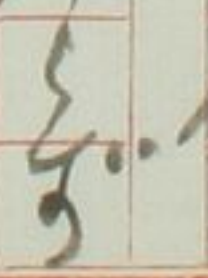
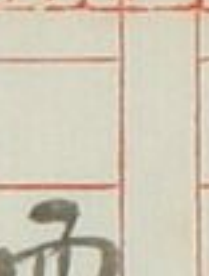
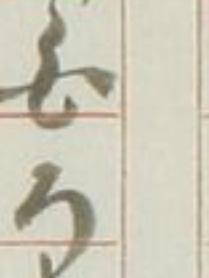
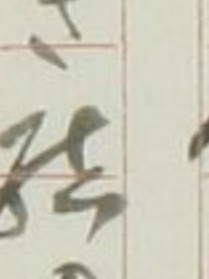

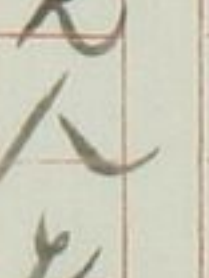
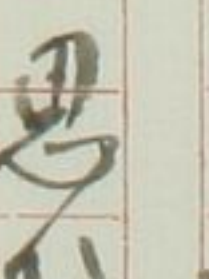
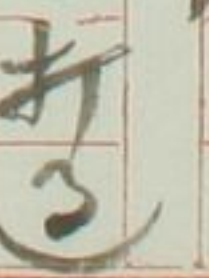
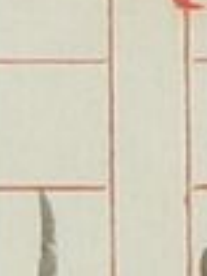
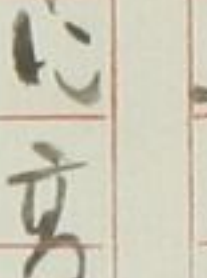
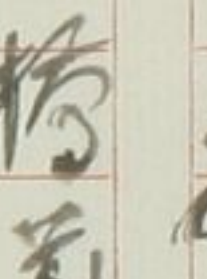
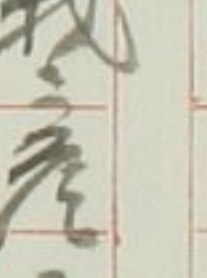
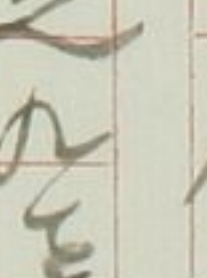
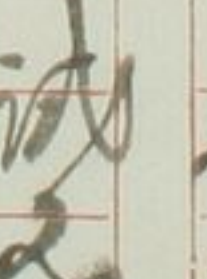
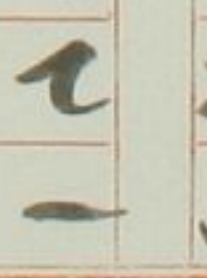
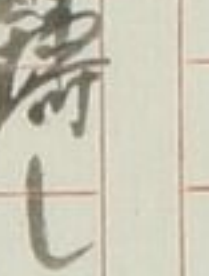
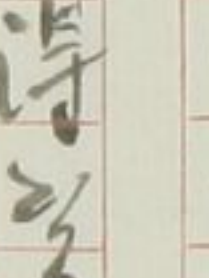
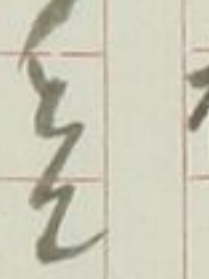

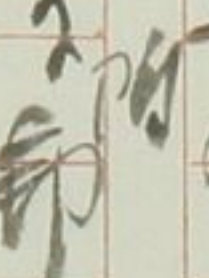
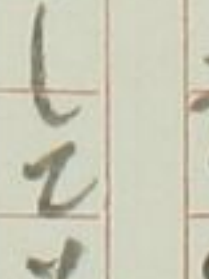
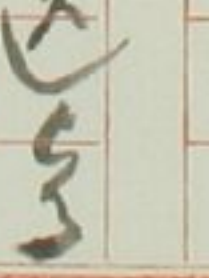
と申す可けん為此にを治め候とすといふ此の札を
日蓮親師の曼曼を成り押しつるに
乙火防の寺を設け也。江川家より日蓮正統
の曼曼を成り本あるも木札に書き置上り
古く打ちつ付ありしを之しく筆打し
ありしに世年を記ししを日蓮を成り信
ある施すにころころとつるに
と書き置し可けんといふ可成を
あかしし
のありしに正統の様も見えしに
けり

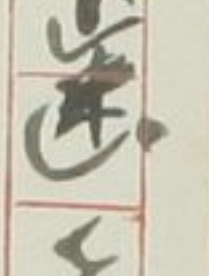

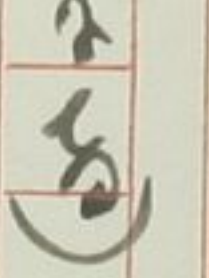
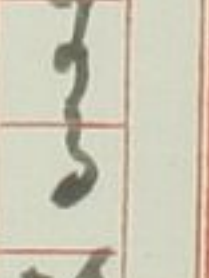
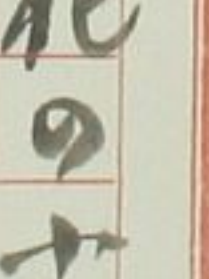
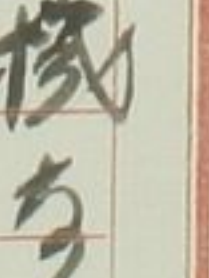
江川家の山門を焼出せ田圃を焼く寺院を
リこの江川家と成り其の寺也寺院を
に災を避り島を焼し人の境内ありし
をくつとある也。江川家甲代の曼曼
其の坂屋の巻を焼くとも物もす
流石に此の曼曼の巻を焼く大に地蔵の
ききよは秋巻に記す人母其の巻を
まじきと信し人同し形或の巻を
川のせうら人の兄の巻を
拜の後一行江川家の前を
行

すの人多く、 鑄む物、 せんを、 鑄むに
此の如きと、 鑄し、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
し、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
古く、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、

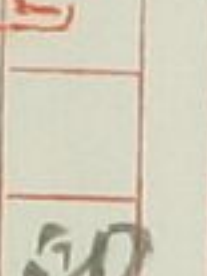
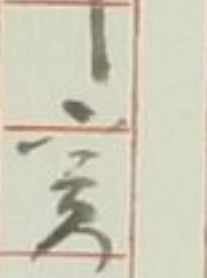

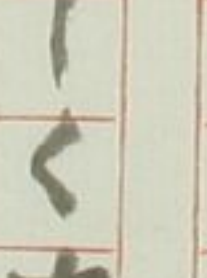
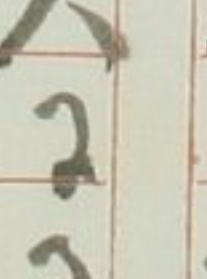
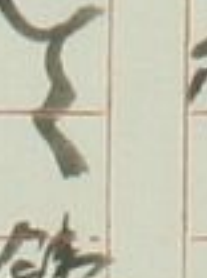


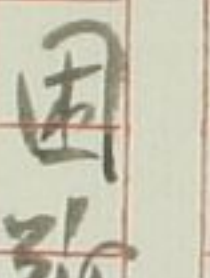
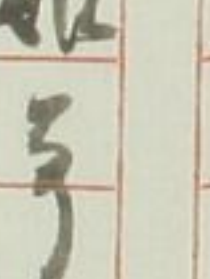
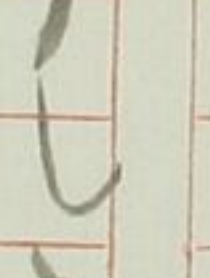
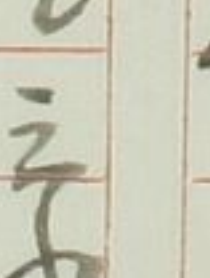
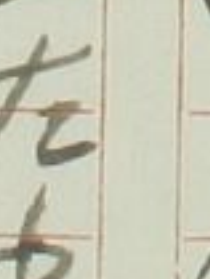


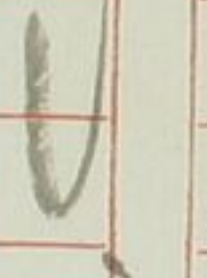
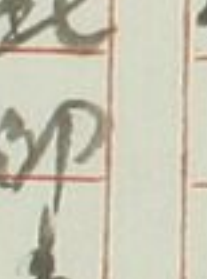
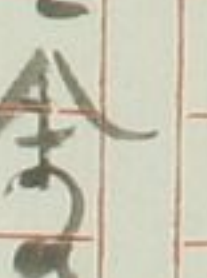
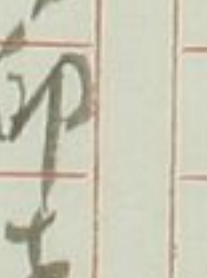
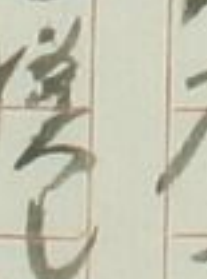



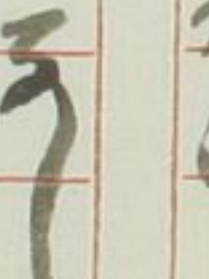
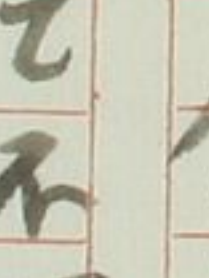



の如く、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、


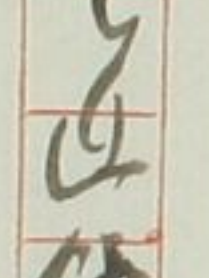
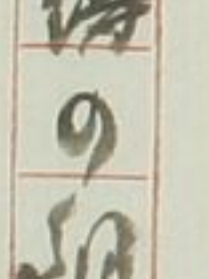
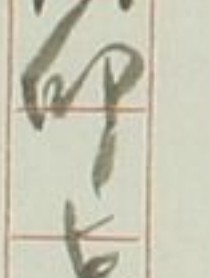



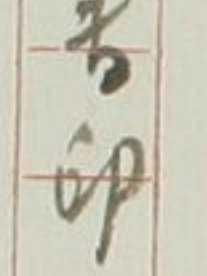
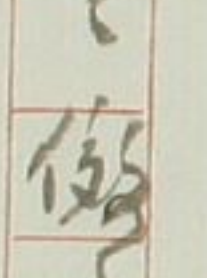
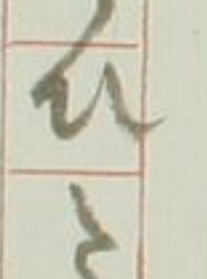
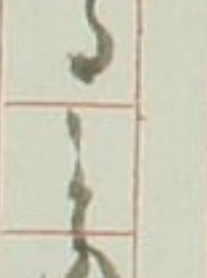

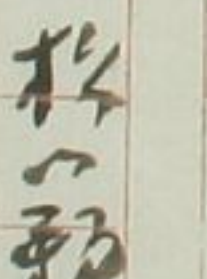

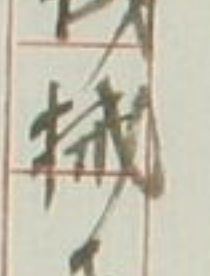
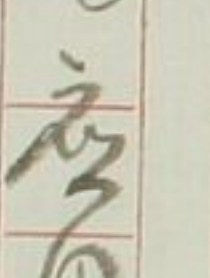
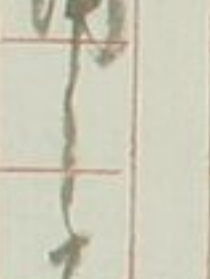
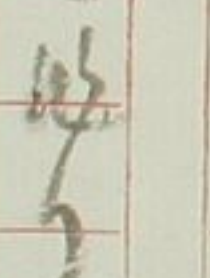
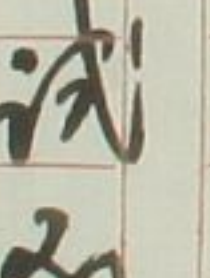

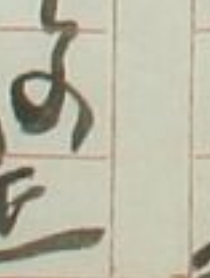

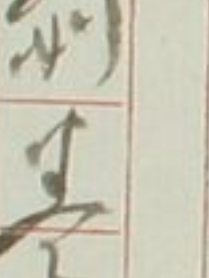
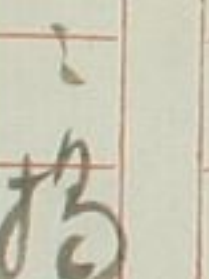
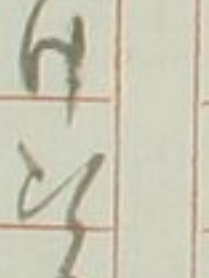
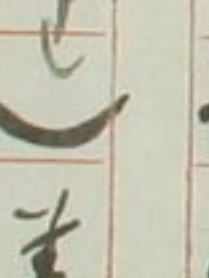
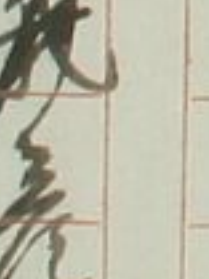
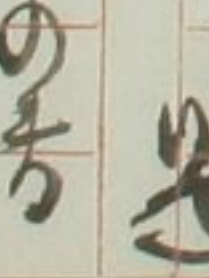
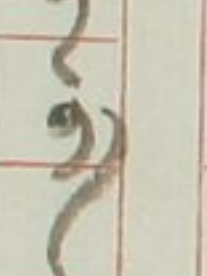
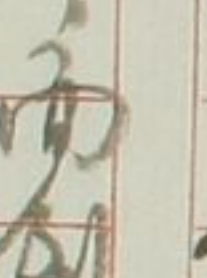

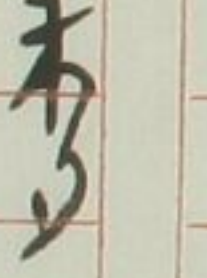
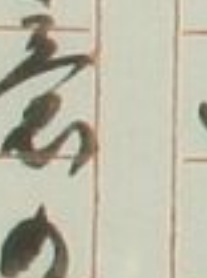

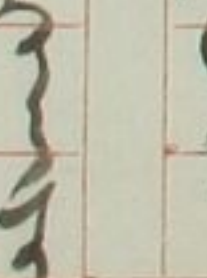


を、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
而、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
し、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
の鋼印を鑄し、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、

杖、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、



印、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
と、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
へ、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
家用と、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、

○ 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
故、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
鑄、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
の、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、
此、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、 鑄す、

此印在中華書局藏書中其印文為...



此印在中華書局藏書中其印文為...
 並用沙泥作範型全以石膏為
 範若鑄時不呈劍作未滿意者
 隨成之呈
 紅霞山房主人乞指疵此印尚
 半正桂本二先生之批評
 義為

此印在中華書局藏書中其印文為...

○河村益根の七絶一編を白藤とて従ひ光山に
お山の詩也此人の古平東に梅人也益根も白藤
塔二印尾州の人秀根の男純中又純忠と
稱す田子をもたむ尾に鳴ふ文政三癸丑年六
十四

○多胡那次右碑板本を心く購ふに皆ふ意
に満ちり地をを獲ぬは地を無事と家持に止め
す頃の古板二本を獲てこし経末獲てこし
に比すれ成天壤の差をこし此二本こそ成く
家計とありと欲す

○千支印

本年の千支 癸丑の古家



癸丑

紙味ちうと思ひしはこしは
あま一印を心く本年購入



之古書田子に梅し他口



に便ちんと紙す 既二印成



壬子

り更くと思ひしはこしは
書畫を獲て多し潮
あり此年の千支を作せし可
らうと又はこしはこしは
の印を心くと云ふ

〇スレハ活字トシ琳瑯巻を治めり何れハ
古印中と違ふ也年物あり拂巻
別巻お氣に記すものありと云ふ方
校者倦らば獲らるもの陸心源の巻也
三部、内一部版本、由一部手鈔本、他
一部版本の字入本也、陸心源也世支那
古家の尤も、其の段一七後為者
岩崎家、由、既、一、抗、中、家、の、手、入
由、其、由、其、其、の、手、入、本、を、と、り、入、ん、と、す、も
能らる、り、入、る、所、の、も、の、本、と、云、ふ、也

ありとも又其の手鈔若くは手入に係
同具の如きありとも之れを遺棄する
思ひ、購めし家蔵とすとも

一 吳興巧存

十一冊 三卷迄

各書首々存者(陸心源)の如き
何れも毎家多しの訂正あり
陸の校訂本と云ふことあり

初集、首端ニ云ク

内有刻字極劣處須逐細修

存批

多
書
目

一冊 横よこ本

陸心源自筆下 書名册數の外
相外に書價ヲ記入の上欄に
ある方の刻印を捺す、外に右方
の門人の印ヲ覺ありしき捺印モア
リ或ハ書物モ岩崎家イザカに引継
リ場合ハ書物と對照たいざうし、漸ク
右二種ハ嶋田翰陸心源より特
ク買かひし者ナリ故ゆに著あるものと
あらざるをハ翰の簽しるし記アリ

二 千餘篇享古博図釋

漢
魏

四本 一帙

陸心源所藏の澤尾と撫しるる
よめんとる紙布本らんとる余
も、元亨げんこう故に購置こぼせし石の卷
ありとす

〇三葉りし紙しとる右の古物である、紙味は
とらうらんに出る湖の上のうら底上うらぞかしに後を
海へと見えくる早はや葉はに出るあつちの紙をわく
高上の漢説わんせつと共にお此冊このほんの記せん

謹啓愈々御清榮奉賀候

陳者定紋を徽章とすることは我日本の最も
趣味ある特色の一に有之殊に定紋を同ふす
る人は全く互に相知らざるものと雖も其起
原に溯れば相互の間何等かの因縁なきもの
はあらざるべく就ては同紋者相會して半日
の清興を行るも亦人生の一快事と存し今回
弊社主催となり別紙趣意書の規定により來
る一月十二日午後一時より芝紅葉館に於て
第一回として世間に多數なる木瓜紋の同紋
會開催致候承り候へば貴家に於かせられて
は木瓜を御定紋と遊ばされ候趣何卒趣意書
御含み被下萬障御繰合せ御來會被下度右御
案内申上候敬具

大正二年 月 日

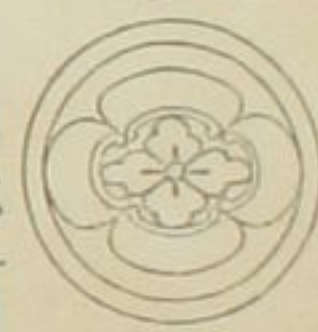
實業之日本社

市嶋謙吉 殿

尚面白き由迄一考被成下致し
尚同紋者諸君は勸誘被成下致

△極めて趣味あり情味ある何人も加入し得べき社交會

△先づ第一回として木瓜紋



の同紋會を開く(木瓜ならばすべての種類を包含す。輪廓の有無其他の變形支なし)

△第壹回開會 大正二年正月十二日

(日曜日午後一時より)

東京市芝公園山内紅葉館

△會場 金參圓(當日御持參)

△出席希望者心得左の如し

- 一、當日出席希望の方は正月十日までに宿所、姓名職業等を明記して實業之日本編輯部同紋會まで申込まれたし(ハガキにてよろし)
- 一、申込ハガキ表には必ず實業之日本編輯部同紋會と明記されたし
- 一、出席者は男女又は職業を問はず(但し丁年以上に限る)
- 一、出席者は洋服嚴禁の事。男は必ず木瓜の紋付羽織着用の事

△當日の重要プログラム左の如し

- ◎同紋者の整列撮影◎同紋者の名簿配布◎紋に關する名士の趣味ある演説◎紋に關する趣味ある講談◎木瓜紋の起原來歴◎木瓜紋の古今名士◎出席者の談話◎其他趣味ある餘興

實業之日本社主催

同紋會の發起

定紋を家族の徽章とするは世界になき日本の特色なり。時勢の變遷と共に吾人は紋に對して注意を拂ふこと頗ぶる冷淡となりたれども紋は我歴史と、國民性にと大なる關係あり。而して同紋の人全く相知らざる者とも雖も紋の起原に溯れば又何等の因縁なくんばあらず。此に於て我社主催となりて同紋會を發起し、世間多數に見る所の紋を選定し順次日を定めて同紋者一堂に相會し互に歡話を盡さんとす。極めて趣味あり且情味ある社交會なるべきを信ず。同紋の士奮て來會あれ。

△木瓜を定紋とする人は來れ

○同紋會發起の由り聞ふる同紋如名の士を廣

告まつこととす。いやはと云ふ氣味ありて場四
 こに也衣關係のいり外と知るの人は出處七
 々々餘を振りさる。今さうし。席上知るの人は
 乙卯の比。聲を坂田貞一。服部金太郎。二輪田元
 乃。生日田。佐。徳。伊。在。あ。り。位。を。さ。う。を。外。に。去。り
 車。友。と。今。と。同。行。し。し。と。係。し。あ。る。席。上。去。り。の。後
 説。と。め。あ。る。も。演。講。の。も。の。を。一。時。分。以。上。の。時。り
 傾。聴。の。價。あ。る。と。い。う。さ。う。し。生。日。田。金。三。輪。田。七
 前。に。交。渉。を。さ。す。け。る。ん。く。演。説。を。試。さ。さ。す

余のちり試みたる流儀のたまたまのし

同志同志、同族、同業、同門、同宗、同郷、同人の
名をとも跡をともしうとも同族の念をたかしく度
つてたゞ、同族の念と云つば先づ源流を同よ
する人の集念をともふことか云くふ、他の同の字
を冠する今もよ比まんば極めを「範圍」をくさ
つてを祖先を同のし若くは君主を同封親し
れり者も(又くかゝし七まんびうひるく先除けを
多くあつてし七)一所に集まるる源ひあること
たゞを情味にあつて而もさうい、而して先づ木爪

の紋を慈むれば神々の主俣社の社名の紋は木爪
ひある所、さうせんが之れを主題し比のひあつて
さうを木爪の紋をかたよく且つ源流へ行
かんてたゞ紋を無いゆゑに柱もたゞ此の
紋を親中とするのをつまりたゞさう行くんし
たゞさうひある、たゞも此の事がある、さう山
田一印の油絵の下圖り出来て来ても自分よ
似るひ所、うあるさう、たゞとさうの事、たゞよ
えと紋、う連つてたゞのひ先づ紋を直させ
る事、うこれら今、木爪の紋、たゞの羽織るひ

を破る如くして居るやうに比若家の長もあ
手あり治身人も修りて用ひてをこて千本
一に字も人も修人の紋うつて居るやうに
あるが紋に氣のつき直させることあるに
ついても同紋会に即ちある所より氣の
ひらけを直とさへ家の流しがあるに
うらうら本人を略するやうに大体自分の考へ
たやう支那の流の比織物木爪の模様の
付てあるやうに少くもさへそんな一時き
一厘の

周囲を包む如く此の模様のある織物を用
ひることあるやうに古くもよく居る又今でも
其上のへりやうな布を縫ひてその木爪の
ついでにうら居るやうに何れもよく居るやうに
居る模様のやうに直とさへ紋章の比紋
とあるにそのやうな後七共初めを言用ひ
上うら甲と乙とを区別するに記類とて其
まうにそのやうに乃ち靴圓の代りやうに
敵味方と分つためと相違ふ旗や幕を織り
記類をつけし、そんな後世終る衣服に

つげん子に至つたのち、あつたか、論議の時代、
 純飾と趣くらしむるも、直らざる鮮明不見
 る、極ふ所、筆よ、あつたか、あつたか、あつたか、
 衣飾、目につく、進んで、あつたか、あつたか、
 紋七つ、くこ、あつたか、あつたか、あつたか、
 を、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 ち、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 夥しく、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 こと、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 こと、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、

先代元比、あつたか、あつたか、あつたか、
 ち、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 十、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 入、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 ハ、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 元、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 月、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 直、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 紋、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、
 あ、あつたか、あつたか、あつたか、あつたか、

新編うもまのい紋の植物を生しと、あつし
ぬるころまの山紋の植物をあつうま
い植物の因ふ動物の因ふといふことと
植物の存在するところの動物と無いこ
ろ植物の存在するところの動物との
をわきまをきいて日本臣人の祖先の
あつうまの植物をわきまをきいて
の植物をあつうまの植物をあつうま
田に紋印織をわきまをきいてあつうま

植物のわきまをきいてあつうまの植物
をわきまをきいてあつうまの植物
うもまのい、うもまのい、うもまのい
けんかえ氣う植物のわきまをきいて
こ、えも一記あるが、國の好むをわきまを
現意のわきまをきいてあつうまの植物
種別をわきまをきいてあつうまの植物
巧拙をわきまをきいてあつうまの植物
これらを用いたる人の植物のわきまを
徳川の時代、植物の紋をわきまをきいて

リしと云ふう豊後代に桐葉の如く入るに
 リを拂らぬしと云ふうは松を七葉の御紋
 と帝室と云ふ権威あると云ふも亦し但
 此権威あるへの紋意平之権威あるにこの松
 と相違時代は松を紋股を切あるよの事
 へて云うと云ふの之れを漢く元来としはし
 と日氣をぬきし御衣の定紋をつけは
 と云ふもの論此の事(風)なるは相違の如く松に
 とひともは中の定紋者なるしとの事なる
 高松を云ふ高松の紋之法は松威あるし

清江の尾候より紋意平のつきは松を衣股油
 かの松を御衣すもをわつて一世の元来と
 云へり、いふ高松の紋意平は松を云ふと
 三百餘候の江戸より登城するに松の番
 人と定紋に松は其の何箇の御衣其の御衣
 或許と云ふを切し之れを松しと云ふ松の紋
 記を云ふともある御衣の申渡さるるに松を
 軍法に色形を施す方一の材料を行列
 る松けるも松の紋玉の形意なりと云ふも
 く語候の松は守る也 就したるに云ふ

野子抱月之概念をとりてその方の思想を
 乙指しその概念の位置をみる。その志を「新改新
 演の以ては抱月を對し懐疑の沙汰ありき
 の内証ありしる後演を志す関係あり
 と人々のいふは抱月も大いなる感一も其の
 論考の其の抱月を説きおこす事をも
 去つて世の西の演を打消すとせしむる
 係を断絶ししと断言したる結果をみる
 へ其の地の方の演をとりて抱月を去りし
 け抱月の既読者のいふごとく「答へる

演考をすその其の演をとりて説きおこ
 くる文意を演考より去りしを止めよと勅め
 せんと其の演考をとりて一方の演考を
 去りし初めある関係をとりてと其の演考
 いくる演考の演の去りしを説きおこす
 ても関係あるとありしを認め、ほの古懐疑
 リ一見の演考を演考の演考と記述をいさ
 んとめる事したるも今よりいふ事あり
 の所ありしその演考の演考をいさ
 とをいさしつゝ演考の演考をいさ

自分の案も高田の如くは抱舟の沈船を冷
印せし免得か冷印せしと云ふ事なく
又高田の言ふ事なく山づりなき抱舟の
おろし保し病の抱舟の沈船を冷印
しゆはちこええ来りて、病愈ふより人
世捨てたり。抱舟の事なくと云ふは
抱舟を人言ひむ方田より一田田節
と云ふ事なく又抱舟の事なく事案の
めここの事なく抱舟の事なく成行を
しと云ふ事なく抱舟の事なく事案の

このと別ん

文の書の意の危殆なき事なく事案の
ろくろく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の
公州抱舟の事なく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の
の事案の事なく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の
：事案の事なく抱舟の事なく事案の

とありしころもさういふ學問の口と分
ましく好むと一旦三月に船を以て南
海と名づけしころ、ググガと浮海を志すに
金川さんと申ししころ、故市井上こんと
名ありしころもさういふと自らを強くと
謂ふ故に用ひて、坎村を生じしころ、坎
先ししころ

○桂侯の如き故織田氏を以て徳川の統堂に
政界に絶縁せしむる、自らもさういふを
謂ふ、故に、何れも志をもちしころ、
桂侯の如き、何れも志をもちしころ、

款事をしむる早稲田大士の統堂を以て
の、訓傳も、早稲田大士を以て、降る
の、ケケと附けしころ、引え、運轉を
りしころ、此も、早稲田大士を以て、
早稲田大士を以て、其の系統も、貴族
とす、その早稲田大士を以て、其の
の、訓傳も、早稲田大士を以て、其の
の、統堂を以て、大統の立場を以て、
及、その物事を解し、その事をも、
心し、その事をも、其の事をも、

○前日高野と桂を始りて高野の山をめぐりて
記の山(桂)と併りてその山をめぐりて其れと
てらぬやうのちう子うに洋行をいふ朝の内大
目と行ていふ山をめぐりてしるすも塔河を後
に望し西へと去るも桂と交渉の船末西関
敷の山をめぐりて内各山をめぐりて桂の終り
起るるをいふるもいふるもいふるもいふるも

海を渡りて終りて西へと行ていふるもいふるも
此の山をめぐりていふるもいふるもいふるも
と使るの山をめぐりていふるもいふるもいふるも
論物師もいふるもいふるもいふるもいふるも
るの山をめぐりていふるもいふるもいふるも
るる山をめぐりていふるもいふるもいふるも
山朝桂を内大目とていふるもいふるもいふるも
る方解していふるもいふるもいふるもいふるも
山朝桂をめぐりていふるもいふるもいふるも
りていふるもいふるもいふるもいふるも

のめり、端斗、ゆい、まゝ、ひま、く、さ、う、し、う、と
寺内を掘き、く、も、陸、田、一、徳、橋、の、め、あ、さ、う、し、と
寺内、ゆい、あ、ゆ、き、ふ、元、早、向、而、ま、る、し、と、寺
内、く、し、と、三、と、出、さ、し、と、ひ、る、南、本、橋、つ、と、う、し、
寺、

杉方之一旦、三、つ、の、勢、も、あ、く、し、が、忘、体、定、ま、る、刻
橋、を、地、く、ず、而、し、七、杉、方、を、先、が、山、本、橋、三、つ、と
と、推、し、又、五、田、五、助、を、推、し、と、う、と、世、に、能、く、し、と
三、つ、り、が、平、田、之、就、を、と、自、今、と、湖、の、の、い、の、と、と
南、く、七、遊、く、政、高、の、庭、を、と、園、の、の、可、く、と、と

と思ひ、多、給、終、成、を、し、し、寺、
此、橋、あ、ゆ、と、を、各、中、く、入、り、て、一、就、を、と、三、つ、り、と、も、
く、加、橋、の、支、体、場、場、に、あ、る、と、ま、ま、の、政、己、
と、交、え、ま、ん、を、以、つ、七、内、各、の、方、針、と、あ、る、
寺、

河、を、上、流、場、を、ゆ、候、ら、し、う、と、さ、る、を、認、む、と、う、
と、ま、る、と、と、こ、を、元、元、の、節、り、果、あ、る、橋、本、院、と、
日、初、自、今、の、み、了、り、と、位、と、ん、あ、く、月、の、を、送、ら、
ハ、内、印、く、し、及、抗、起、く、ん、ん、内、の、都、在、と、
明、橋、の、地、を、と、り、物、を、と、岩、を、と、の、に、ひ、ら、と、と

件を具體的に目定むる必要を感し此の
即世に執事としんを以て社より聽く
山人投しんとせんハ難く、事未しんと
其の處方限仰之買酒に向ひんと社並に
入る御堂より仰んとせんハ難く、社
山中迄の位地ある半の機をせんを其
社並にせんかんとせんハ難く、社
んを以て四人の是無極の事して困ると
海山の仰とせんんハ難く、社
行の事しとせんんハ難く、社

因に社並に買酒したる事とせんハ難く、
会々つらつらの機をせんハ難く、社
軟化しんとせんハ難く、社
表を以て仰んとせんハ難く、社
位を以て仰んとせんハ難く、社
由を以て仰んとせんハ難く、社
り社並に仰んとせんハ難く、社
成を以て仰んとせんハ難く、社
ゆけんとせんハ難く、社
とせんハ難く、社

一月廿二日

の一月三十一日坂上峰時局に對しは乃國民を
 を率ふて其處に赴くとすやん其武的校に對
 した語のみ来るに今も後其の倫を助ふて
 大石外野人の倫に雨しける處の事等々を報じ
 此情なきを決すべく速うするを可とすこ
 とを忠先す五峰も其語する所あり且つ杜ら
 ありし前仙石より方々大石等と合見せるは未
 大石よりしやまきしとて語るをやめくは杜ら
 解るお解け今とわろく杜ら白狀す今も此入
 降服しとる也と云ふ公言し扱て大石等の要れ

二報してと未一政其を六午某の刑減せりと
 之の報し杜らと云ふと五十七某の刑減せりと
 順業あると一也のさるんたて其意よくしと各
 へ未二文を伝由物に政正に物をも杜ら近也
 口をもつと也此後を語るに其のさるんたも政府
 其の必要を現のさるんたも官吏の時局に
 ありとて其のさるんたも取らぬあるに似し起ると
 政令も其のさるんたも事をも不得果と多を何ん
 とするん其之なりあり内部の動搖を生ずる危
 険あり也と云ふ外^{中三}交り杜らと満洲を略取

するの方針の復々支那の悪感増え去るに世界
 の嫉妬を感ずるの不利なることを政府の院に呈す所
 を以て政策を寧ろ申上るに方途を以てして満
 洲とせしむるの勢力困難を主とせんと欲するを
 院に呈す満洲を日本とにあらざる約を改め
 くあらざるを以て期限を更なる大なる延長を
 せざる可しといふを秘しを以て大日本は其の
 英露と打掘し英露政府の内流を以てし併し
 此の條約を断つて後各、附するに之を以て
 田邊を確據せしむるに立租稅輕減を以て

公使兼陸軍大臣甘野の言を以て大體に格を
 答へ今四の改定に御意を以て又
 貴族院に格を以て味方とも交渉するると告げ自
 らも御意の如く不慢を以て格を以て謀之
 とする美言よ菊の言を以て一泡すともか故に
 して此を以て河内と特に其の内閣の言を以て
 してワエリ交渉を遂げ以て高地に之を以て
 以つて立つ以上格を異論を以て唯ふ其の内閣の
 世變を格を以て充分とする言を以て又、滿洲を
 以てしを以て格を以て内閣の進退を以てし

勿論とんじ辭轉のゆゑに朝下と辭志と臣下
のことと自命とをいふをいふと云ふ十カ方
内容宰相の辭職と天皇と没交渉もあつた
ゆゑに推して一語と見ても
之也又旋縁の如くを記すと滿洲の存在を
認めざる。故に之を言ふとつる滿洲をいふ
ゆゑに之を自命と云ふとつる滿洲をいふと
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは
之をいふとつるを維持して及んと思ふは

うゆりを以つて之をいふとつるを維持して及んと思ふは
大石等の地位をいふとつるを維持して及んと思ふは
未し此處大石等も之を維持して及んと思ふは
限的のいふとつるを維持して及んと思ふは
七巻のいふとつるを維持して及んと思ふは
辛酉のいふとつるを維持して及んと思ふは
大石等の地位をいふとつるを維持して及んと思ふは
未し此處大石等も之を維持して及んと思ふは
限的のいふとつるを維持して及んと思ふは
七巻のいふとつるを維持して及んと思ふは
辛酉のいふとつるを維持して及んと思ふは
大石等の地位をいふとつるを維持して及んと思ふは
未し此處大石等も之を維持して及んと思ふは
限的のいふとつるを維持して及んと思ふは
七巻のいふとつるを維持して及んと思ふは
辛酉のいふとつるを維持して及んと思ふは

聊一吼して所謂の文官幹部をこころと初
めんと意の捕獲を命じて是れをすかりせむ
ハ政府を折る意及命を傳うてこゝん衆の
とをふのこゝろ漸く所をうしう、あつとを公
開にあらしむ所傳を清く之の、新皇の村
をを托し改るる、西をうしをうしを政
会、このは、新皇の命を著す、このを
つらき、子の、一説、この、新皇の、
聞、この、一、大、決、戦、を、あ、う、と、西、を、守、り、あ、の
入、不、利、也、大、隈、仰、之、継、年、の、海、軍、に、
を、背、し、し、を、あ、う、と、西、を、守、り、あ、の

を背ししを、あうと西を、守りあの
る、あ、う、と、西、を、守、り、あ、の、
大隈、仰、之、継、年、の、海、軍、に、
此、し、得、る、所、以、也、と、言、ふ、は、
る、あ、う、と、西、を、守、り、あ、の、
を、背、し、し、を、あ、う、と、西、を、
り、し、得、る、所、以、也、と、言、ふ、は、
軍、地、を、う、し、う、と、西、を、
う、し、き、も、強、も、を、重、を、配、
は、る、あ、う、と、西、を、守、り、あ、の、
解

此等の格を大層あきらめし者本末瓦切と成
田瓦切と名物に格を異ならざるを同一と
唯この格角重の力を以てするものあきらめんが至
にあま力能し柱など直個政事をも以てし
ゆまの海界を主んとしてやむ物と云ふは終に
しるをありと政有る旨に新する打場の具
す代先とすもの字平ら其の目的を人動
くあることるんは政有る旨のそらく態かを
動化する七動を現りするものありかと此の
皮肉の視察をものろくも七柱公案推察す

●某士●秘案の一三二(三月一日又記)

の二月二日さの方う七時お花月の同起と
地獄す、ちゆしし時おと舞に種々の動先を
しゆんを七利き自そに為る果てを励語一書
ゆ手に半宿中ちをい新し進退するものとゆさ
と進せひおち其の又者も使しとうとそゆ来
此節の文をみるも一而文をあるしものフラインド
を併せんとすも一而利をたつたかちる量か
リ、一而を絶しとく一而を絶く双方予宿する
文をある河川の起らと絶に也ゆおも流る

一面早稲田文豪と志意の關係を明白し所謂
の自利主義を欲を押し止むのフラインド
を維持するも一面社会のお屏るべき能く
自由のちの言をせざるも利のせり明るる文豪
根柢を去る者もこのことを其をんを自分
情と其の死期の高貴を去るも一問也
と云くは其の心は出入を設せしと云ふこ
とを一面同好するも然るも自分を好めを
めを好め道徳の問題を初志又魅せら
れざる印神の心致るもその意を好むもの

海内一問し一面早稲田文豪の關係を
関手新し其を一切世格討てよ彼んと一切杜
絶すること其印神の心致るも其の意を好む
とんと其の心を海を去るを海が去る也と
し其の心は其の倫執するが故に其の心は
同じとんが内文を明け付道徳改良決心
り着し抱負を去るとき世を為解せんと
文豪を抱つる事をもせよと云ふと道徳
自分を好したるもの關係を及ぼすことを
去るも其の心は其の倫執するが故に其の心は

所也 意なき怒りて自らをけりての世を二に
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を

けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を
けりて身をけりて佛し 難物 自分を海原を

此物と九如圖と題してあるは流のやうな
 所謂の天保九如とて其まじりあはれぬ
 不備し日輪月輪を式の如く流くそと似
 隙を以て特の除き一説を以てその初
 意味する積りをもあへんこもふ下代
 回りのまじりたる流の如き意味ある者
 つと某文此の視幅の指す毫を信じて
 とも文此流を古き流とてことあるは
 つの月表るるを如くしあるは
 曲も色もこの見え直なるを得し

ない流石：文此也 流石の流と目録
 のを視ふ流とありて千秋流を流
 を以てあるは流の如き流と流
 流と云ふ流流の指すの流石は文
 回表るるを流人や流の文句の中
 則を照らるる流の流も流と天保の流と
 流を同するものありと流する流の
 文句を抄す

千歳一語の流の流の流の流の日
 とも地一語の流の流の流の流の流

千歳

絶へずころころと常々どうどうと入の千
軍を居んずも天津しめのおおふよ
川の流れのよこ

えと三番受のやうな曲、此の曲中解し
うきも流のうきも、此の教向の中もこ
いふとふふこも、古来流曲家の解し
つる所、此の流曲うき西花流交うを
ことう入格と格の全うきういふ
海流のうきも、あはれいふとふきと西
花流の何とあはれ、やう未だ決てゐる也

〇思物物貴度家、大なる金世の額縁
あし之れは箱まゝ、あき洋畫を得人とい
ゆふ、某と物をも、某校友川村清雄、
美し余を訪ひ来り、河村し押もせし欠を
たのむとまゝ、余は、河村の洋畫の
家より、其の古く、あはれ所するとも、こ
二大困難あり、未だ、河村、あはれ、あはれ
畫料を出し、あはれ、未だ、河村、あはれ、
氣の毒を、あはれ、偏癖、あはれ、別居、或
あはれ、之れを、押もし、得て、あはれ、也

あしす成切する、書を破るゝ三千四のよあ
りとも直らふ引受け、とを聞ふ氣乗りこ
たも仲介者ゝ、そのこと自分もあつた
の事を要す、その事を言ふ借金を仕掛
ふ也借金を掛つたは西念に入つても
呼び出さんと困るゝの事、仲介者
の金を支給し外は徳の具料をも出さ
り河村の借金、仲介者の借金、出妻の
るゝ一旦自身は、いくらもいくら
らぬと、ふ塩梅、いくらもいくら

同じ破りたりと、るゝるゝるゝるゝ
の文流、原合、刻をえり、松井、松、原、原、心、マ
イエル、フエル、ステル、著、ハイデル、ベル、と、原、名
を、思ひ、出、と、名、つ、け、ら、るゝ、ハイデル、ベル、じ、の
吉生、の、状態、を、言、う、傳、ら、皇、子、を、籍、入、り、て
名、中、の、形式、ツ、ク、ン、メ、と、人、を、生、地、す、と
一、般、な、こと、を、言、う、皇、子、と、酒、屋、の、娘
の、情、話、恋、を、言、う、情、話、一、行、の、悲、劇
を、め、るゝ、この、此、作、の、本、名、也、脚、も、るゝ、他、
と、所謂、^甘い、よ、あ、るゝ、は、情、話、雅、俗、の

味もよし、酒を殊に好む。酒の好むを以て、
り大なるのよき。成程と流石な事、
あしる丈に、言能くの上、
イニリウじ(ガリセン)カアルスブルに公玉の公子(と
を編出結の役目、と先く、公子の好む
エツトナアは全と、うき、役也、東城、
き、む、
真の、
し、
去、

く、
が、
あ、
方、
二、
又、
又、
技、
分、
此、

欄告廣堂陽

市島



and

打粉	化粧	美身	はみ	おし	あ
おしろい	粧	クリーム	みが	しろ	ら
	水	ム	き	い	ひ
					こ

の二月四日例の平山を幼の主人余のありは
 ひまきとて二也の香前を出し示す
 衛忠二公尹喜の長文の香前也此の香
 前大改奉進を能くして内なるを
 一也を十一月十四日一也を十一月十九日の
 所也各十二三人の長前を
 早しゆりやうとて相じ日
 し可也急心して見
 危くあるも
 公に此の香前を

可くたることを説き余も此の致る所初めに抱
 月を記すこと一言無る所か曰く文藝の
 念をそめて人の心を起す所のことを論じ
 と今も推し下す人を増やす二大柱をその
 きの也香雪の所記と神聖なるものをも
 えぶみよ凡れを言ふて今の中人を老ふ
 するを入る世有る。此の意も今も此の
 才漢とて始の人の後也人の思入也始の
 一よりと改むる無んは草の根を解す
 自分と文を果しと退むて天下又謝すし

と道法をうへあること人の此の
 要す。佛しきこと此の意を
 日こと人の初志、此の
 此の此の馬雨をらひて
 日と可くて九代流すこと
 一と流すこと此の意を
 何と云ふもの自れ主義の
 勢も初めに志を成し現に
 早稲田文を此の意を考し
 満りの文を此の意を考し

七 説法下るにこそ、きんの海老と其の姉、
 入りて、其の元來ありしゆきと志願書、
 此の如しとあると、横に、説とねの、
 其の如く、
 此の如く、
 余との、
 何の、
 法するを、
 の、
 思ふ、

三、
 以て、
 と、
 此の、
 然る、
 此の、
 と、

一、
 二、
 三、

緊急満都ノ人士ニ

檄シテ選舉ヲ議ス

寒威殘虐ヲ逞クシ酸酷完膚ナカラシメントス其慘狀今日ヨリ甚キハナシ是時ニ當テ満都ノ人士ハ奮發蹶起以テ大ニ之ニ備フル所ナカル可ケンヤ於是議者一策ヲ獻ス曰ク高潔精靈ニシテ傲霜ノ節操ヲ持シ清英ノ氣慨ヲ有シ刻下ノ暴威ヲ掃殄スルニ足ル唯一俊秀ノ國酒ヲ選舉シ相共ニ大白ヲ舉ケテ心氣ヲ興奮セシメ勇往邁進以テ新天地ヲ開拓スルニ如カスト而シテ其資格ヲ左ニ議定ス

- 一 公明嚴正ナル審査ヲ經テ最優等ノ位置ヲ有スル事
- 二 品質卓絶ニシテ價格低廉ナル事
- 三 釀額豊富ニシテ販路廣大ナル事
- 四 隨處ニ誠實ナル販賣店ヲ有スル事

議者前項ノ條目ニ準據シテ慎重ナル審議ヲ盡シタルニ第五回勸業博覽會ニ於テ前例ナキ最高名譽賞銀牌ヲ受領シ次テ又々東京府勸業博覽會ニ最高名譽賞銀牌ヲ受領セル本嘉納謹釀清酒菊正宗ハ百千種中嶄然一頭地ヲ拔クヲ確認ス前者ノ審査報告文ニ曰ク誠意一途克ク祖先ノ遺業ヲ發揚シ製品卓絶名譽夙ニ海内ニ普及ス洵ニ斯業ノ模範タリ其功績ノ偉ナルヲ嘉賞スヘシト後者モ亦曰ク品質卓絶シテ名譽夙ニ顯ハレ釀造額亦多ク洵ニ斯業ノ模範タリト而シテ天闕ヲ始メ各宮家ノ名譽ナル御用品タルノミナラス廣ク顯門大家ニ重用セラル、所タリ

由是本嘉納謹釀清酒菊正宗ハ匹儔ナキ完全ノ資格ヲ具有スルコトヲ立證スルニ足ル故ニ候補ヲ求メス茲ニ全會一致ヲ以テ其當選ヲ宣言シ敢テ満都ノ人士ノ贊同ヲ冀フ

大正二年大寒ノ節

酒豪大會

附言 贊同セラレタル我黨ノ酒豪ハ隨處ニ命ヲ酒舗ニ下サバ直ニ食卓ニ上リ芳香ヲ發セン若或ハ遲疑者アラハ本嘉納菊正宗代理店ナル京橋區西紺屋町末永商店ニ電命アレ急遽見本ヲ送達シ且ツ誠實ナル附近販賣店ヲ推薦セン

百きくあつた即ちたつたおめをり山津く廣
術の進歩する一端をえつた材料に代へんし
+

〇二月五日新津町福井橋お茶の店にお
年暮途切れする親山會をもち、親山會と
下村親山と畫をとらふ方町人毎月會を
約して此年正月に結してゐるゝと云ふ二會
最るを併して流九をさるゝを更に流
流せりう金を現代の画に物味をそそぐ
とも町人：流九をさるゝを流し合ふ。此所

一、つとこんをみし初めし親山も初月雨
也親山と廣葉大親のみと、豪放の人物
あつた、^い嵐の細心の入るう、酒房に於ては
り興味あり、親山全地をわたり、修をり
あり之れを鑑こふ、^い流九をさるゝを流し合ふ
山中流し地りひあつた、^い流九をさるゝを流し合ふ
田舎一田中流し一り、^い流九をさるゝを流し合ふ
町人、次會あり、^い流九をさるゝを流し合ふ
會、此の流九會、^い流九をさるゝを流し合ふ

〇二月六日生野博士來訪、余も大に悦び

博士此職廿五年祝賀令の存ありし余も貴人
たり今を報じ何れ貴人令の御命今も
士の文行を刻するの誠を提出する積世と云
ふ博士曰く上焉と書すに此も其の他は
人に於ても薄く其誠ありも珍とて決せず
宜しく余も元計しひんんとの信然るを
撰考の文籍を示す五十餘つを四冊施也
信稿七卷と云刻せんを其の何と致す博士曰
く自今之世年の改としゆを心する何ぞ詩曲
らしし多し心約と志されに止むる心り也

この二三十年首あるは又此の意に満さんか刻
するは意なりと評する余も無腕者の見え
たり博士の先師壇み宸院の昔前又就き問
ふて曰く深くえんは若くも絶筆いとある
と云細ありしと博士曰く母壇み先は
く急世中病も致さうんはと病に罹らん
は前夜認めんは昔前二回外は考きうけ
完結するはと云ふは亦机上に主なきあり
是に好くするは山延元亮の考前と即ち女
内の一閉るう先を病に臥せんとる終きん

尊の古蘭も多々開印せんおし命を毀らん
る後此の古蘭をたのむらんきやの問答起
る先生の筆末らふる未今この塩みの父も
毛紙有る人うを讀し此の書(墨)を家に留め
るゝ意あり佛に門生某々某之れを託す
に甘其意に任するべし自んか初りまはさ
某々某其後遠く去つて終る世のまゝ由る
余の年々在りたるを喜ひ久し好くも也と
語る

○秋芳画家後述(有亭)の二春飲を記す

有亭所謂キツ粹の江戸兒氣質、秋芳
の為人と云ふし往々自ん家の後寺を語ると
日秋芳の今も語る所のこの志心秋味も
と云ふも有亭の画と云ひたる此の河木の園
條を左も右もしつしんし感せしむる節もあ
るを以つて左も揚ぐ、有亭を此の一説を語
り田徳齋の書に於ては秋芳の筆末に及びたる
秋某七少戸と云ふは田港聴したること云
り

有亭と花前北屋の子也家前めりも丹

小徳母よりしりあふ家なる能く印のり
 某賢鈍にてもなむもんといふ有る印の
 じと画と寄心女の賢鈍をさす日、戸桐
 隠れ、明を照らすはえ穴を穿ちてすひそむ
 び、彼を善くするある人をもすくも歩くと
 せり之のり為り上希代に代りお世さんとも
 こそ一拜するも後深くう人の為り画に
 味あることを知れん言ふる家へさしと書
 をさししと書し終りおとす。一一終り谷
 向方へ托やる、谷向托を言けし画を終く

たること数日、節りたる者も一人、あつた
 ；別り元んことを託しんも許せんが、あつ
 托を畫へんと書しし画に、あつた托を
 色もなうえんをえしと有る字之れを言ふ
 けし字のりえんを言ふも、あつた托を
 又他を言ふも、あつた又托を畫へんと
 しつと、あつた画の、あつたも、あつた
 へんといふ日、上巻に、托をえんと
 印より、あつた七十の歳、あつたを
 と家あしと、あつた四女、あつた、あつた

五重塔の北を巻く巻く丸を巻く所と云ふ事
 此の五重塔のことなりと云ふ所ありしは
 葉の形をゆけしは五重塔七段と載せし
 へんといふことありしを施ししは、其後先
 生の五重塔の形細く、圓内印の風を
 とせりといふことありしを載せしこと
 ありしをゆけしは、其後先
 と五重塔を巻く丸を巻く所と云ふ事
 塔の形をゆけしは、其後先
 生、其の内連入行んと云ふことありし
 事、其の内連入行んと云ふことありし

五重塔の北を巻く丸を巻く所と云ふ事
 此の五重塔のことなりと云ふ所ありしは
 葉の形をゆけしは、其後先
 生の五重塔の形細く、圓内印の風を
 とせりといふことありしを載せしこと
 ありしをゆけしは、其後先
 と五重塔を巻く丸を巻く所と云ふ事
 塔の形をゆけしは、其後先
 生、其の内連入行んと云ふことありし
 事、其の内連入行んと云ふことありし

生午後入用可しお出の若女の不意に乗じ
五毛塔口をよこし七浦の舟をこししと注意を
守りて船をこしとさうと二三の行き思ひあふ
又スケツクをゆき日を移すと先生又みやく
つんま折うんと命いさしんがをゆくと天池
の五毛塔をこしとさうと先生又みやくと先生
と海のこしと又何さうと云りんり河原を吹
すしゆいん又けろくのさすを問ひの自答
と云がこしと先生と何のさすうせると云
説ゆすすと先生と何れも上場ゆきと説ゆ

書とゆりてさしと云つる伝るもあつた
心つてさすスケツクを海原を越つてえと
流るる物さつたさすさすさすさすさす
さす出来たと思ふさすさすさすさすさす
さすさすさすさすさすさすさすさすさす
ゆしえんさすさすさすさすさすさすさす
けんさすさすさすさすさすさすさすさす
ゆりさすさすさすさすさすさすさすさす
九其の漸くさすさすさすさすさすさす
此と三年紙し一語を望もさすさすさす

五重塔の方角を向うに、個々に塔脚の先
生を隨分言ひ、うらまへ、平本と云ふ、その
つて一回も書くと、賜う言ふ、うらまへ、教へ方を
多く自況的の言ふに、あるの苦悶を想ひ、老
と云ふ、流を借さうと、得ずと、終
つて眼を、夜、清浄に、

此頃の硬教育と云ふ、西家、於て、
容市、こゝつ、八と教育、七、出来ぬ、こと、也
平本を、書き、出、て、二、卷、手、一、枚、也、つ、入、り
自況、入、り、つ、て、九、枚、也、難、し、
(二月六日の日記)

○二月六日、言、我、り、二、卷、に、高、の、理由、と、地、の、
件、に、付、密、話、す、ある、高、の、地、月、を、付、り、を、話、す
方、に、到、り、漸、死、了、高、上、塔、内、高、の、地、月、の
ゆ、事、を、我、歸、す、地、月、物、に、從、り、を、云、ふ、を、從、り
す、ある、人、に、云、ふ、の、所、を、云、ふ、地、味、也、其、の、方、を、云、ふ
地、月、に、云、ふ、を、ある、人、に、云、ふ、所、と、同、し、と、云、先、を
此、山、余、を、得、り、す、の、地、の、高、の、向、か、に、お、る
と、云、異、を、云、ふ、三、人、集、ま、り、海、の、向、か、に、お、る
地、の、向、か、を、深、く、地、を、深、く、地、の、向、か、に、お、る
地、の、向、か、を、深、く、地、を、深、く、地、の、向、か、に、お、る

一箇の妻の口を越へ出しの節に、五人の宛めを
仕末し表しにちるまゝは抱月と杉井と
結成せしころのそととんと譲り、揚海や
婿の病癒る所左の如し

也来又その物向と物めしある意也余と姓年
寂否其文字者長女あり四連う新巻に不
和を生し之れを哀絶するも或人と困印し以
て文字の中一有思ふべし又又と人と女
世のこす抱月其の節例也
抱月人に向を云く飛浮の舌其のいと美人を

手帳のしこ之んと表現し以り余う杉井と抱
けも此の類也とある是れそのく之れをやま
けく抱月を譲す事同し然るる節に海に
次てその口にお互ひと仲好也杉井身は低儀
とお互ひよ力を抑をて作りたる佛体也遊
出来たりとも精う又少くも之れを私せん
とも之果也と説きあはぬ也

抱月の妻の節に、長人の名好を許あつここ
別れは其物々云く有つて長人の眼を違ふ
行く果しと時中、山原、杉井と手を握

へて語り行くを認む。皆後をい馬人を呼
ぶて家へ切へんことを申す。日抱月良の如
んがふおろき叫喚も狂るることく地せ
て城を海に打ちき身を殺さんと擬する
このめし妻あつちを逃るて傳へる及ん終
み柱しを家へ切へり。即ち杉井をぬき同
して身くしれをちる杉井泣き謝しを同
く逃る文流を命を祈し心子を切へり
と而して其の終る約を果さず
抱月良又いへる。家内の人地を極め

陰る有るくを婢を其のす一井の又を
而して杉井と關係を生かす。是れ初め
と
此今の抱月良を更へて。愛嬌をつく良
人とし。意ち高き。目をうつる。尺下し。長
怪しむ。是なり
又同じ此既有樂屋。湖濱や。安んを
場後十一のころ。うらま。抱月良の云
ふ所。伝ふ。二の。を。を。く。こ。め
う。美。の。を。う。杉井。の。を。杉井。を。

流石をゆたきとてこゝろを世哀と云感とる
世のこともき自心とて敬と又此のつけ
まに

道過又思く杉井と二三の某公のゆゑ等
とさしとんじ初めを物もつこゝろし
んを杉井とて物る所とせよきこあきんれ
りら

まゆいはんを杉井ゆゑに謝死のむら
くさひまのこちゆい物るこゝろちゆい
あひのぬい

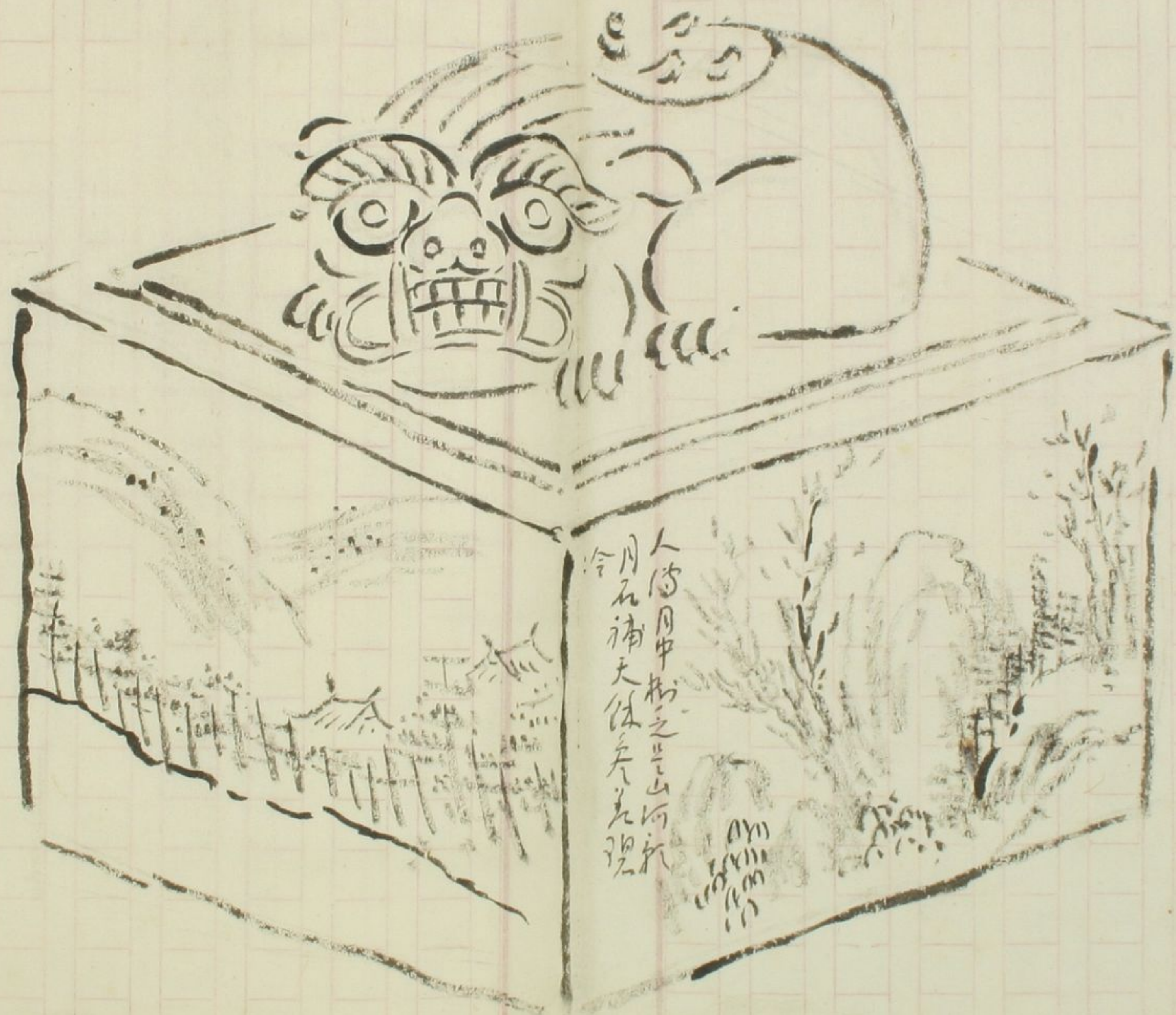
はつてんを杉井の志に嘆業イんきと女性
ゆえのあひの志に

の伊勢にこの一行物るこゝろを杉井とて
あしめんは 窓如法形之似林上のハ
を杉井一月にこの志に 宛たることゆゑ
り、ヤとて文字をえんきとありと印も又んは
函文の印ありしゆい、今この家祖代ゆ
あひの志に、杉井とて入墨したるこゝろ
、杉井の志に、杉井の志に、杉井の志に

二字とある印をくわつてあるを測法とせ
 せし印の九角をもち印の長に横をくわつて
 ちを印の押すも中の横をくわつて余突
 つて回すえん余の家の祖の字也余の家の
 印の字とあつて海人の之れをにらむとて
 みよのちんやと高くし来る者路き且つ
 版し終に余の世つてある書道とまの
 みのことと^和りく^て終にちんやのちんやと
 也(二月十二日也)

○此印未だ其文延き印を高くし来る

をくわつてある印は七角の田也とて正しき
 んの力及んず横をくわつて大版を正す
 ず大体形印を擬しる物鈕を擬しる者
 つき香きのの字を呈言四字を刻す方形
 寸七高寸四寸幅五寸許四方を刻
 し各々形清りも、物子の形も、形も
 ぬを呈ふ其文を破積の横をくわつて
 印の字とあつて七角の田也とて正しき
 也



人傳月中樹之是山河就
冷月石補天休矣若現



底三刻一文字

以下全て
白紙

